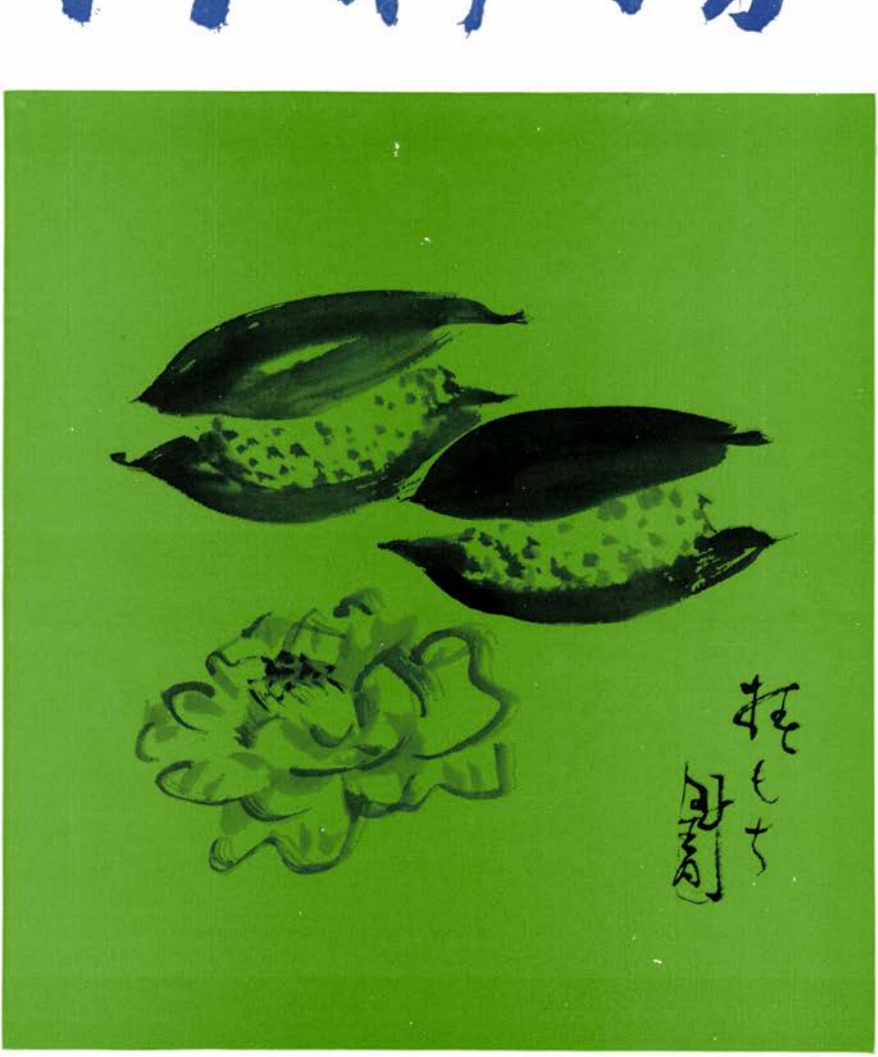
川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十八年二月二十五日 印刷
昭和四十八年三月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻五五〇号



No. 550

二賞中間発表

三月号

「旅人」以後の

麻生路郎作品

— 22 —

三十六年六月号

不朽洞句帖

パントマイム　くもの巣払う所作もする
映画の情事と区別のつかぬ暮らしもし
自家用車　捨ててあるような住居なり
終電の女を待ってやる根気

豆秋を悼む（二句）

死を知って楽しく遺書を書いたらし
豆秋が隅に来てそな悼む会
山を恋い　イゴイズムとは気づかない

本社五月句会「レジャー」

レジャーブーム貯金なんかはもうやめだ
南海電鉄川柳会「優待券」
社長より古い優待券の顔

（傍島静馬）

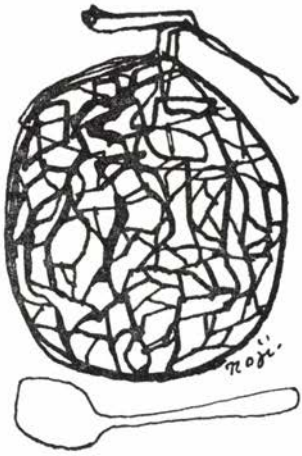
自慢にもならず座敷でけつまずき

レントゲンの痩せた肋骨をいとしがり

折れてないヒビだけですよが痛むなり

くしゃみ一つやっと固定帯で耐え

固定帯にも馴れ寝返えりも上手



中島生々庵

ふれっしゅ

昭和四十八年三月号は「川柳塔」の通巻五五〇号に当る。「川柳塔」として誕生してから来年は一〇周年を迎えるというので企画委員の中でそれぞれ担当部門の相談がはじまっている折柄である。

勿論山高きが故に尊からず、柳誌の号数の多いのが必ずしも自慢にはならぬ。肝心な事は「川柳塔」全体にあふれているフレッシュさが、年と共にますます、みずみずしく新鮮さを加えてゆくことへの念願である。人間にしたところが男性と女性とを問わず、服装や髪形だけで世の人に媚びるのであってはならないのであって、その人の人格や教養からにじみ出る健康さであり、美しさであり、新鮮さでなくてはならぬ。それと同意義に、誌面に躍動するいのちのリズムにこそ問題がある。

五〇年前に生れた当時の「川雑」の雄叫びがコダマするような気がするではないか。五〇年や百年位で影が薄くなったり、みずみずしさを失うのだったらホンモノでなかった事を意味する事に気付かねばならぬ。

座右の句

人生諧柳は日々の風を見ず　（薫風）

私の句

背伸びしている爪先の痛いこと

小出智子

川柳塔三月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

ふれっしゅ……中島生々庵…（1）
旅の栄華……橘高薫風…（2）
川傍柳初篇研究…（百十六）……前田喜代人・故岡崎重義・清川端柳風・故高須唾三味・丸博美・藤井和雄十府・岡田甫……（20）
「旅人」以後の麻生路郎作品……（22）……傍島静馬…（2）
川柳人葛飾北斎……東野大八…（22）
川柳塔（同人作品）……西尾栞選…（4）
水煙抄……菊沢小松園選…（30）
一分間の柳論……傍島静馬…（43）西田柳宏子…（53）
秀句鑑賞……（同人吟）……浜田久米雄…（28）
……（水煙抄）……正本水客…（29）
戦後二十八年……北川春巣…（38）

旅の栄華

橘高薫風

草臥て宿かる頃や藤の花

藤の花は歳時記では三月暮春の候に属する。

この句は、黄昏の藤の花の覚束なきむらさきの美感と、草臥れたあとの安息感とのすぐれた調和で、芭蕉の句の中でも第一流のものとされている。蕉門題陀物語は建部凌岱の書いたものだが、その中で、この句について芭蕉自身が、これらの気色は旅の栄華であると、ある人に云ったと記述されている。旅の栄華、何といい言葉だろうか。旅が生活であった芭蕉には一句たりとも旅吟ならざるはなかったのだし、生活が旅であった芭蕉にして

川柳中山道六十九次……（2）……冨士野鞍馬……（26）
四八年度二賞候補作品中間発表……（24）
近詠……諸家……（19）
大阪も……高鶯亜鈍……（27）
頭で創る美と若さ……（座談会）……岩田美代・木村弥栄子・不二田一三夫・小谷葉子・板尾岳人……（40）
第20回大萬川柳大会……（46）
きのう・きょう……本多柳志……（45）
奥能登……河内天笑……（51）
雅号ぶっちゃけばなし……笠原吸江……（63）
初歩教室……本田恵二朗……（50）
大萬川柳「決断」……川村好郎選……（52）
柳界展望……（新之助）……（54）
本社二月句会……（庸佑）……（56）
各地柳壇……（文秋）……（60）
一路集「ピカ一」……高津徹也選……（48）
「迷い」……大江秋月選……（48）
「本家」……大山と金選……（49）
編集後記……（一三夫・葉子）……（65）

座右の句

濁った声は澄んでは来ないこだま　（白柳）

私の句

イミテーション今日の身飾るにふさわしく

河野君子

かかる深遠な述懐も出来たものであろう。

川柳人は旅行吟を軽視する傾向がある。路郎先生すら句集旅人のはしがきに、「旅を詠んだ句は私に思い出の数々を再演してくれて忘じ難いものであるが、私と同じ環境に置かれていない人達にとっては興趣が半減することを思い云々」と書いておられるのは、一理ではあるけれど私には心底うべないがたい。旅行吟の醍醐味は、芭蕉をはじめとする俳句、短歌にたずさわる多くの作家が、嘗って立派に示してくれているからである。自然との出会いは人間との出会いと変らないようである。旅情高まるとき、自然が自ら近づいて胸襟を開いてくれるのである。

澄んだ空、青一色の湖面を前にして、私は路郎先生の「旅の栄華」に接したことがある。昭和三十七年七月二十三日のことであった。

十和田湖よ　みな酒になれ旅人へ

川柳塔

西尾栞選

ハッタリの順に新春の広告欄
Z旗のように年金値上げ論
損な役買ってやっぱり腹が立ち
周辺にごろごろ国盗り物語り
人間を支えたルール古しという
他をけなすそれが競争心とやら

出雲市　尼　緑之助

落日の赤さ悔やしさこみあげる
火焙りの刑を楽しむ炉ばた焼
世界地図日本は力んでるみたい
奴凧落ちても意地を張りつづけ
手袋をはめて豆腐屋も隋落
お隣りの新婚時々音を立て

松原市　谷　垣　史　好

口紅は無くとも健康美を誇り
本心を見透している瞳の丸さ
玉葱に泣いて幸せなる女

倉敷市　小　野　克　枝

昼までを寝て母さんのスト終る
通知簿へ母が笑った子も笑い
情熱を持てと病人から云われ

大阪市　大　坂　形　水

回答に重みを持たす引き延ばし
職業的人を疑う目と出合う
犬に用さしてる人に逢う散歩

娘の三回忌

戒名にまだ馴染めてない三回忌
遺品まだそのままにしてる三回忌
命日を知ってくれてたお友達

青森市　工　藤　甲　吉

雲竜型で共産党の土俵入り
労働者農民の歌こだまする
からくりをちゃんと見ている世間の目
人の世の汚れた人へ雪は降る
吹雪く夜はちろりが恋し火が恋し

倉敷市　水　粉　千　翁

丑の春

前向きに平和が歩く丑の春
まんまるいとは人柄を言い足らず
さだめとは云わず砂漠へ種を播き
目がはいりましたと達磨歩きたい
そんなとき見せぬおんなのほつれ髪

門真市　福島鉄児

停年へ時計も寿命つきたるか
三十年愛の囁きなくて老い
日曜の雨へ老妻茶を淹れる
寝る時刻互に違う老夫婦
押してみる師走の風の強さ知る

倉敷市　本田恵二朗

夕月と語る倖せとはなにか
立場を護る煙幕の色を選る
夕映えの漁港舟を呑み舟を呑み
藍よりも青くなったが恐妻家
遥かなる思い出は佳し夫婦箸

鳥取県　清水一保

何となく妻にライバル感じる日
人生に中年と云う座を貰い
行く先は黙って続くホルモン屋
沈黙の対座へテレビだけしゃべり
酒だけは結構いける風邪を引き

倉敷市　野田素身郎

年始客役に立たない奴ばかり
おさわりバーからしかつめらしい年賀状
晴着の群れが横断歩道を渡る新春
肝臓をこわしてしもうた三カ日
反主流派ばかりが僕を買ってくれ

大阪市　中川滋雀

汚れても自転に任かすほかはなく
あるがままで生きてはゆけぬ嘘もつき
コンパスが伸び切れなんだ図を抱く
ひと言を楯にこぼれる愚痴を聞く
半分は八卦が当る道を踏み

岡山県　浜田久米雄

春や春一万円の軽さなり
定刻に来て誰も来ずお茶も出ず
先方の腹はあとから教えられ
腹立てた六十代の夜が寂し
灰色となる人生に突き当り

香川県　三井酔夢

牛歩でもよし雙眼の子を信じ
初詣で拾った小犬飼うときめ
賀状よく見れば再婚したらしい
七転び八起きと春に書き続け
三面鏡白髪抜くとは思わざる

大阪市　山川阿茶

もういくつ寝るとノーモアお正月

桃割れに洋服着てる大晦日
ジレンマにおちてる事だけわかっとり
由緒ある私の皺です年輪です
ポーカーフェイスへ良心はノーノー

美称市　安平次　弘　道

芸術家にされ職人肩がこり
小さい嘘悔いる善人けつまずき
入試の子へ我が家のペースを合わせ
童謡の海は公害など知らず
ジーパンの足もてあます三部経

宝塚市　傍　島　静　馬

小遣いをやるから孫に認められ
ふところ手金に困ってるとは見えず
誰ももう云わぬ老父の若づくり
冷込みを寒天農家苦にしてず
ファミリーランド何回乗せても切りがない

神戸市　小　浜　牧　人

片肺を大切に生きて和を愛す
成人の羽ばたく視線遠くおく
ゴム風船飛ばす空から春がくる
バイブルに手を乗せてより愛重し
ひしめいて雑兵吊皮にすがり

藤井寺市　西　いわを

浮草の手応えもなく動かされ
起きぬけに雪がかかった寒椿
嘴の替り黒豆拾う箸
水玉の落ちる刹那をシャッター切る
恍惚になれそうもない気を配る

松江市　小　林　孤呂二

松の内バンドのゆるみ気にならず
酌み交すとき人間らしく頼もしい
作文の父はするどい目で観られ
嫌なのがいるから後列で並び
四十五の抵抗むなし眼鏡もつ

大阪市　正　本　水　客

木　曽　路

旗挙八幡　松籟を義仲の声かとも
粉な雪の軽さ遠山陽に光る
伝説の峠しばらく風といる
脇本陣さざんかの色があるばかり
宿場の人情がそのまま固まっている家並

大阪市　有　信　新之助

罪の重さか聖書がほしくなる
もめて来た娘に男となって訊く
全力投球するには骨が硬くなり
いけにえの生命を保たす車えび
どの理想もお金のとこへ突き当り

八尾市　香　川　酔　々

古　典
（古事記）

神様が天の岩戸で初笑い
（源氏物語）
石山の月輝いて筆進む
（枕草子）
風流のはじめに簾上げる雪
（徒然草）
仁和寺の法師のざんげ尼のこと
（奥の細道）
一つ家に遊女が寝てて眠られず

西宮市　島居百酒

野良猫がもう来ないのものの足らず
連休へ後二時間の息をいれ
夏からの気がかり落葉焼く師走
念願の自適をあわてさす物価
遺さぬと決めても減らす気にならず

桜井市　岩本雀踊子

街の灯へ仮面をつける夜の鍵
川上の暮しが流れる春の河
美しく老いたい女にある嫉妬
死火山のような女の泣きぼくろ
尻尾ふる男が顔を二つもち

和歌山市　野村太茂津

妻の義理半分負うて春を待つ
この妻があり恍惚を待つ炬燵
人生の後編老妻のペンが冴え
邪心尚疼くを妻の処方箋
夫唱婦随夕暗だから手をつなぎ

大阪市　本多柳志

年賀状無駄と虚礼の墨をすり
成人式扱いにくそうなのも列び
株価欄見直す眼鏡かけ更える
セックス軽視神さまらしくない誤算
女悲し微笑む武器に頼りすぎ

米子市　林瑞枝

優雅なる孤愁ひとりを清く生き
箸枕孝行な養子の席を決め
逢いとうない客にも悲し紅をひき
議員バッジすりの会釈へ首ひねり
適当にもうろくして欲し嫁の愚痴

和歌山市　垂井葵水

乳房妬く火を手鏡の奥で聞く
遠い日が重荷にならず日記閉ず
愛しさは祈るかたちに組んだ指
奥深い脈膊記憶にのみとどめ
枷かけてからの女の智恵験めす

新宮市　大矢十郎

目も腹もどう狂うたか三カ日
学校放送ないしょの話町へ洩れ
どう見ようとままよ孫とも子供とも
向うでも受話器を包む深い仲

だび悲し鍵持つ人にひしひしと　新宮市　川上大輪

席譲りそこねて今日へ悔い残し
うなずけば話のわかる人にされ
妻の眼の届かぬ距離にあるスリル
胎動へ母となる日のリズム聞く
躾け糸とれば幸わせ崩れそう　大阪市　金井文秋

おもちゃの電話より本物がお気に召し
甲斐性ない親に似て来て叱られず
別荘地買えとはよほど買いかぶり
張り替える襖だシール張らしとき
ビニールで包んだ餅を供えられ　大阪市　小出智子

餅を搗くあと幾年のならわしか
泣いている人へ友達甲斐もなく
生ぬるき夫婦となって老いはじめ
庇理屈を言う子みくじを引きたがり
　末っ子一人田舎に行く
野を駆けるわが子は帰るのも忘れ　大阪市　河野君子

ユーモアでくるんだ理屈にしてやられ
神苑をデートの場所に新春を燃え
嘘一つ鏡の自分が許せない
ドック入りへ挑戦初老の試練かも

不足ない暮しで運動量不足　竹原市　山内静水

歩が揃ううちの嫁ですうちの嫁
赤ちゃんがむずかっているミニの膝
考えを変えれば親にもある自由
拝啓ご無沙汰息子から無心
哀れとも年増おんなのつけまつげ　島根県　堀江正朗

華やかさみんなさらって嫁にゆき
怪我のないのを確かめてから叱り
まんざらでなさそう妻の意見聞く
大切にされてトイレへ近くなり
ややこしい話になって行くトイレ　宇部市　平田実男

子に主役取られて恙がない我が家
妻の座と云う脇役が忙わし過ぎ
へそくりが溜って変な気が起り
飲むと寝る癖喜こばれ邪魔がられ
残業残業寝袋だけとなる我が家　岡山県　出原敬一

早々にパンダを見てた二号の子
柿乾して北の雨戸は閉じたまま
菜っ葉服トイレは寒いとこと知る
涙涸れ実家でレースを編んで居る
保母さんがあやす事情の子と別れ

濃霧の川幅新淀川はメルヘン　豊中市　戸田古方

人影まばら芦屋市役所は師走

小休止したよう元日明けてくる

ずっしりと晴着の孫を抱いてみる

元日の雨は静かに降るもよし　大阪市　不二田一三夫

ジャパゴンといわれニッポン金を貯め

猿使い怒った顔が猿に似る

誰も　もう相手にせぬか妻と旅

寄席（二句）

天王寺村にいた頃の芸の味

十銭の頃の芸人芸に生き　鳥取市　河村日満

半分は自己の選挙の票を読む

二男結婚（三句）

その内に孫もと夫婦夢多し

式の日を子もしんみりとして話し

紋付きはいいな吾が子だから更に　尼崎市　黒川紫香

年下の夫母性愛を持て余し

瞳が合うたとこで雑誌をちと拡げ

南　紀

鬼ケ城太平洋を噛むように

大島は真近か串本灯がともり

家元の紋で羽二重届けられ　高槻市　若柳潮花

秋の熊野路

燃え移りそうに緑を這う紅葉

老杉の昼を閉ざして霧ふくむ

御詠歌に風あり青岸渡寺の秋　松江市　中川晃男

裏町へ太陽も裸でおめでとう

一字毎に書初の袖の位置

ほこりかぶったまま　転ばないダルマ

本年もよろしく救急車走る　岡山県　大森娯句楽

セールスが無駄話からまるめ込み

松竹の軸引立てる菰冠り

買いたがる妻へ笑うて答えない

親馬鹿を笑うてすまぬお正月　宇部市　石川侃流洞

感情の堰をひと言どっと切り

ちわ喧嘩なだめに行って巻き込まれ

札幌の雪美しく降るテレビ

ああ元旦に深夜の汽車が去って行く　大阪市　西出一栄

金婚へゴールインしたお正月

頼られてもたれてすぎた五十年

老夫婦毒舌交すも趣味のうち

安静に馴れて心臓なまけてる
倉吉市　奥谷弘朗

ピカ一と天秤にして気がつかれ
隅っこのある環境がお気に召し
インフレを政府団扇であおぐよう
大山を窓に新居の日向ぼこ
大阪市　天正千梢

あこがれた偶像忘れ男の胸で泣き
意義を見出しすぎ心を空しくし
ムダを省く老人こわくなり
老人ホーム静寂すぎて不気味なり
倉敷市　小幡里風

少しずつ距離を縮めてるのへ拍手
デコボコのコースだ父の跡を追い
雑布をしぼったようにつかれ果て
別れしかない涙線の堰がきれ
兵庫県　遠山可住

運命に逆らうまいとする牛歩（丑歳年頭吟）
神経痛の足があしたを霜という
恩給があるので孫を連れ帰る
おにしめになればおばあちゃんおばあちゃん
愛媛県　渡辺暁童

白黒でみれば何でも白と黒
cm死者にむちうつ如くなり
すごい自信にむごい惨敗

雨の音さえ妻の又ぎき
倉敷市　藤井春日

子のために生きねばならぬ紅をひく
乳臭い娘の口から云いよられ
晩酌の美味さまだまだ働ける
切れすぎる腕が自滅へ追いつめる
伊丹市　小川静観堂

握らせて貰う掌だけで怺えてる
紫が似合うてもたまの散歩ぐらい
心から惚れた女ってみつからず
無人の茶の間でうりずんの詩を追う
高槻市　福田丁路

太陽が黒い学びの狭い庭
苦労した百万円が端金
えべっさん頼みまっせと親しまれ
山門を潜れば幽し籔椿
笠岡市　木山遠二

喜寿までも使うてわが名気に染まず
老の身の明日より今日を大切に
うちの猫代代鼠とりが下手
いれとらぬ儂へ代議士から賀状
京都市　松川杜的

真実一路こんな言葉が今の僕
変身を境に人気落ちはじめ
旅情一入カレンダーの月変る

限界へ来て見りや孤独もまた楽し　大阪市　福井野迷路

東郷元帥の最期を診て（一句）

息の引きとりかたまでも偉らかった

暫くと懐しい顔の名を忘れ

採める声隣は何をする人ぞ

千枚漬け好きとアメリカ宣教師　島根県　藤井明朗

薬のみながら余生を論じあい

買物へ一万円札の早変り

寒暖不順南無計報しきり

環境衛生委員便所の掃除して廻り　姫路市　梅谿庵不酔

税務署が笑いながらどうでっか

淋しいなあんたを送ってからと言う

大学を出たんか知らんがもう言うな

議事堂に犬と猿がいておもしろし　松江市　岡崎祥月

松江番傘川柳会長より功労賞を受けて!!

川柳のたねまく骨を惜しまざる

十万の夜明けを城はじっとみる

ご時勢にさからう城で人気持つ

風雪に耐え神話抱く天守閣　今治市　越智一水

雨の音思いを新たに抱かせる

子が主役それで正月よいとする

ちびている筆はそれなり役に立ち

薬より安静にして貧に耐え　平田市　久家代仕男

（従兄元旦の死）

お浄土の旅へ日の出も見ずに発ち

背信のこころを床の梅に恥じ

独酌の変心責める隙間風

人を責め落ち着く先の自己嫌悪　広島市　山田季賛

ステレオの位置替えて見る日曜日

親子して新幹線を造る職（長男幹雄東京第三工事局へ配置）

停年は近し子供に職が出来

広島　東京が集まり　大阪のお正月　松江市　吉岡遁児

山頭火おれにも同じ想の詩

生返事したばっかりに疑われ

2の2乗4とばかりでない世にて

盲学校に花弁の赤き赤きバラ　大阪市　室谷徹舟

夕焼けへ突込んで行く音速機

洪水のようにポルノの週刊誌

白黒を急いでつけて出来た溝

勝つことに決っているでドラマ観る　大阪市　児島与呂志

嘘のない妻がやっぱり俺といる
何んでもが出来過ぎつまらない女
つまずいて乙女　女としてくらす
賞うけた喜び誰にも伝わらず

倉敷市　谷井扇水

古里の感触はないアスフワルト
窓閉めてただ一本の矢を磨く
耐えるのも倖せなどと妻が云う
目標にされて自信が少し湧き

守口市　羽原静歩

修羅道は虚しきものよ揚げ雲雀
好きだとは言えず土筆を摘みながら
出稼ぎの別れを惜しむ春の朝
ホラふいて日本列島たそがれる

守口市　村田瓢太

はぐれ鳥捕らえ二日で逃げられる
真似ばかり九官おのれの声知らず
孫が来て寝正月など言うとれず
神宮暦今更相性見るも初春

小松市　馬場魚山

電線の雪は晴れ間を待って落ち
現実を飛躍しすぎているドラマ
隣家との境と知って雪が落ち
針を持ち続け短大まで仕上げ

富田林市　岩田美代

白足袋がきしむ歩巾も十二月
眠れぬは旅のふとんの故でなし
背かれてからが縞柄のかいがいし
幻想が消えて三日月もとの位置

鳥取県　谷無閑

ストリッパー家には義理の母が病み
齢古稀牛のよだれに似てすごし
民宿の雪なき夜の腕角力
財布の紐ゆるめて見ても高が知れ

富田林市　木村弥栄子

変身へ五十路の命華やげり
生涯の失敗恋を知らず生き
ありがたさ希薄になって知る空気
後味の悪さ汚れた手と握手

奈良市　宮口笛生

もう一升空いたかそうかお元日
年に一度男の着物打合わず
温泉で正月すごす客を乗せ
乗務日誌のさらへ無事故を誓うなり

東大阪市　竹中肖二

失職に馴れ職安に顔がきき
再婚の話しへ女の春が来る
帯解いて女は城を温める
倖せはいつも心に余裕持ち

東大阪市　竹中綾女

三人の子の家めぐる三カ日
どの孫もパンダ抱いたり飾ったり
口約は大割引で通される
一日でプレハブ建てて大工去に

富田林市　板尾岳人

乾杯へ山とうれしい握手する
下山する五尺三寸バネはずむ
あの峰が僕の墓標だこだまする
宝石の光り樹氷にはかなわない

竹原市　時広一路

通勤の足が時計のように行く
シナリオに無かった運で狂い出し
妻の留守呑気にしてても足らず
人につけられた自信でやり直し

八尾市　飯田悦郎

ヘッドライト避ける余裕を持って酔い
油虫憎いと思うが暇がない
スイッチを切るとテレビも寝てしまう
凧あげる所をさがして凧あげる

大阪市　神谷凡九郎

自分を見る僕どんな眼鏡をかけようか
盛装をするから正月らしい嘘
その時心は眼があんなにも綺麗なのに
自分もそやから他人のアラが三つも見え

東大阪市　宮西弥生

待たされてまた覗きこむコンパクト
美しくだまして女逃げる道
正月の客に招かれ雑魚寝する
ぜいたくの一つに普段着の似合う嫁

愛媛県　村上旭童

美人には程遠いから好きな女
煙草やめてからせわしない指図する
眠むかったり寒むかったりでまだ行かず
いける人ながらたよりにならぬ人

笠岡市　松本忠三

停戦の陰で作戦練り直し
木も花も化学肥料の味に馴れ
対立の意見一人にさせとくれ
戒名をつけて貰って達者で居

枚方市　宮川珠笑

内職へ老眼鏡を買い替える
手抜きした業者も竣工祝辞受け
妻強し手乗り文鳥まで味方
まだ飲んでいるのに九官鳥また来てね

大阪市　宮尾あいき

襟巻と同じ毛並の犬を抱き
貴方の句が欲しいと自惚れくすぐられ

孫の死

人形と香花が祖母のプレゼント
産褥の娘にどう話そうか孫の死を

倉敷市　松下梁水

父の描くそのイメージに遠い僕
美辞麗句その空間を散る火花
もう水に流したらしい笑い声
初夢もやっぱり妻に敷かれてた

松江市　恒松町紅

人間に戻り琴聴く三カ日
土地が売れそれから次男異議があり
身障の人に車で追い越され
応接間で野良の主人を待たされる

泉大津市　村上春巳

取得ない男で無事な日日送り
釣銭を当てにしていた子の誤算
屋根までは葺けぬ退職金貰い
天平のニュールック高松塚の美女

岡山市　川端柳子

夫が居て子が居てオレンジ色の歌
寒椿ポロリと身内に先だたれ
たまに意見合うたを夫婦笑い合い
冷静を装う花弁むしらせて

大阪市　黒田真砂

お化粧も念入りにして春の顔
倖と思えど隙間風も吹き
祝い箸心新に名を記し
水仙の呟き聞いたような初春

京都市　都倉求芽

何度目のターンかゴール持たぬまま
土瘦せてやせて値上り待っている
ストーブの正面へ女が先に座し
話題からそれてやれやれ茶が美味い

姫路市　大江秋月

義理で来た見舞は五分程で去に
帰省せぬ訳はバイトで金があり
バスを待つ時間を呉れたチラシ見る
気苦労は雨風嵐と管理職

下関市　志賀木石

四、五十年前の静けさお元日
ささやかな誇り無事故の免許証
電話鳴る度にもしやと新免許
遵法運転あとは神様仏様

大阪市　本庄金三

純鉢へ寒い表戸開けさされ
納得のゆかぬお金に裏があり
老人がたまって来そう日本国
入場無料合図で義理の拍手する

竹原市　森井菁居

皆までを言えない距離が他人様
青春譜日記へしみとして残り
ドラマ盛り上げる端役のそのひとり
夫婦相和して明るい子に育ち

松江市　柳楽鶴丸

子を寝せてからは男対女
一合でクルクル廻る地球が回わる
変身　変身　変身　根性ない男
私語つきぬ十一年を振り返る

大阪市　江城修史

斗病記後姿の友ばかり
断下す脳裡をよぎる亡父の顔
決断へ四面礎歌の身を想う
ひずむ世に心かよえる友を持ち

堺市　藤井一二三

三猿を守れば敵と疑われ
産制のミスだった子に養われ
家が無いばかりに愛が育ち過ぎ
夫唱婦随財布の紐は妻が持ち

鳥取県　森田布堂

定刻に下戸の幹事はまだ見えず
　愛児を車から川に落とし死亡さす
元日の午後が葬儀と寺に来る
人の世の喪中のはがきまた届き
しおざいを身近かに蟹をほぐす宿

岡山県　池田古心

自然への愛よ辺地に住み果てん
逢えば喧嘩逢わねばつのる思慕
乗車券だから立とうと坐ろうと
英雄にはなれず色だけは好み

諫早市　原田明春

初心マークお守りだけを信じとり
丑歳の婦唱夫随の夜が明ける
酔っては駄目とあの妓ウインクしてにらみ
モーテルのネオンへ燃やす好奇心

東大阪市　斉藤三十四

神様も聞いてあきれる願いごと
正義感までそっくりという通信簿
還暦の履歴書をいたわられ
ニューモード追って中味のない個性

大阪市　西川誓二

枚岡神社初詣
鈴守り授ける社務所は河内弁
まだ済まぬローンに慰懃年賀状
うわべを学歴と云う包装紙
嫁既う言葉が却って逆効果

島根県　景山綾美

新幹線（二句）
新幹線握手できないまま別れ
窓一杯名画となって富士移り
眼鏡はずして団交が終り
正直に云えと云わせてつい叱り

呉市　槙田英詩

マイナスでも良いさ言いたい事を言い

馬耳東風の貴方へ依古地になるわたし
石段で思案の足を踏みはずし
Vサインどちらも勝利疑がわず
大東市　土岐トク子

憶い出を飾らう生命のある限り
息子の影を求め乗り過す環状線
「感謝です」握手もかたく西東
残千円余はたいて渡すも親心
島根県　小砂白汀

日だまりがおまえも好きか冬のハエ
席蹴って立ったがどなたか止めてくれ
手のひらを返えし過ぎたらみなこぼれ
引き金を引く指　神は給わらず
西宮市　藤村〆女

代表が勢揃いした面構え
百までを数えて孫と湯を上り
おぼろ夜を一時さわぐ救急車
餅花へ春の日差しも色を添え
島根県　中島英子

元朝へお隣り同士あらたまり
初詣鈴は疲れた音で鳴る
七草も知らずパン食う世の流れ
くやしさをなだめる酒が梯子させ
富田林市　和田維久子

玉砂利のさくさくさくと初春の詩
菰かぶり一際目立つ神の庭
年の暮思わぬ客が根を生やし
四次防息子持つ母胸痛し
羽曳野市　大峠可動

くちづけをして夫婦こころの傷塞ぐ
わが命いま青春の化粧する
人間の限り童話の灯になごむ
病妻を背負う掌があり愛があり
羽曳野市　塩満敏

税金は転居先まで追いかける
諸般の御事情で物価又上る
正月はのむぞと体調整える
まっさらの手袋上り始発出る
松原市　玉置重人

喜んでええのか娘が恋をした
振り袖が泣いてるガムを噛んでる娘
ポルノめく話はすぐに乗りたがり
しようむない時に夫婦のイキが合い
名古屋市　吉田水車

仕合わせは春の挨拶申し上げ
わが春
牛の歩みもすでに七十
貫一よ嘆くな今も金金金
岡山県　直原七面山

橿原神宮初詣で（二句）

散ったのか散らされたのか娘は微笑
未亡人の化粧は生きている証
命ある限りを女燃えて見せ

大阪市　木村水洞

楽しみの一つ孫へのお年玉
四五人で派手に値切ってくる長屋

今宮戎

お賽銭の額を羨む裏長屋

神戸市　仲どんたく

デパートの暫しを老の按摩椅子
お正月東の孫や西の孫
満場が腹へったような歌に沸き

岩国市　弘津柳慶

やけ気味の見合相手の気にいられ
常識に押し流されて法も活き
花札を賭けて母娘のお正月

大阪市　河井庸佑

火に油そそいだだけの役回り
肩書きの手前いや味も言わされる
あほになりかしこになって管理職

出雲市　原独仙

まだ意地を張る気肩の手払い除け
冬将軍いざ来いわが家に築地松
傷心の肩を抱けば胸へ泣き

兵庫県　河原みのる

薬にも毒にもならず風邪ぐすり
境界の欅罪あり三代目
切っ先きを揃えて爺に向こて来る

笠岡市　高木桃里

脱皮して成虫となる朝を撰る
円心をまたいで拳握りかえ
三面の記事へ恩師の茶が冷える

倉敷市　竹内翁童

だれも来ず酒を枕の寝正月
愛枯れてから女のすざまじい
けじめをつけよとせまる十二月

倉吉市　渡辺菩句

僕だけに判る甘えを妻がみせ
僕の過去話せば嘘が顔を出し
僕の肩に星がもたれていて童話

尼崎市　高津徹也

初燕鋭角に舞い風つくる
幻影のそれかと思う蝶の昼
朧夜は朧夜でよし友送る

鳥取県　鈴木村諷子

角砂糖若い二人に夢があり
代筆のはさんだ智慧が気に入らず
居留守使うくらいが智慧の限界で

大阪市　川口弘生

庇われて男の意地が横に出る

二死満塁というゼロもあり人生譜
脱線に枕木痛い目に会い　加賀市　細呂木　魯木

今しばし無常の風よさけてくれ
胃の痛さ医者の顔から想像し
七光り色あせ世間のすみに居る　大阪市　今西　章雅

好物のくわい典医の顔に見え
毒なもの好きで寿命は別と云い
血圧へ禁酒云う医者云わぬ医者　広島県　高橋　鬼焼

よごすまい画布古里の色をよる
背を向けて女は強い語にかえり
人妻と逢うネクタイを妻とよる　富田林市　浅川　八郎

皈らない白柳さんへはこちらから
そのまんまずばり毒舌ほしいもの
結核を押えるだけで幾歳月　大阪市　飛田　好一

共産党たのんまっせと庶民の票
振袖を着ても腕組みミニ娘
現実を遠くにおいている孤独　大田市　藤田　軒太楼

玉串を捧げ還暦こうべ垂れ
後継ぎが出来たと賀状ほほえまし

年功の潮時とみて席を立ち
寒空へ逃げた小鳥をふと思い
飛車の威を借りてと金が大暴れ
晴着魔を睨む目付きで僕を見る　橿原市　岩井　本蔭棒

感情のヒューズ太いのにかえる
ネクタイを締めると父の貌となる
豪雪の窓から拝む初日の出　倉敷市　能登原　白水

愛誓う人の素気ないとこが好き
今が花たんと我がまま言いなはれ
合格を祈る心の裏表　堺市　伏見　茂美

松の内酒に姿勢をくずされる
子供部屋ノックするよな親になり
納得の行くまで聞けぬ老かなし　堺市　高橋　千万子

観せるため晴着の三日間忙し
午後一時奥さん釘付けメロドラマ
世話好きは定年後も管理人　大阪市　神田　秀峰

★

お降りの中のお詣りききめあり
初心忘れず接触事故ですみ
うちも過疎ひとり平均十二畳　北川　春巣

悪いとこばかりゲソッとしたドック
浪人はさよならしたい三月だ

西尾　栞

布団の裾おさえて愛情ゆきとどき
鳥籠の鳥に小首をかしげられ
飲めばまた饒舌となりかなしけれ
しゃべるだけしゃべらしてからという謀議
奇遇からはじまるドラマ港街

菊沢　小松園

みだれ咲き花のこころの裏を見せ
美しく老けて暖にも出さず
拗ねている女の美しさだけのこり
千羽鶴の中の一羽を折りはじめ
その笑顔あたりの空気あたためる

若本　多久志

老境という価値感にある悲哀
愚かにも宗薫ものを立ち読みぬ
煩悩は失せず恍惚にほど遠し
老いてなおペパーミントの味を恋う
ワッハッハと笑いとばして死なん哉

近詠

須坂市　高峰柳児

すくすくと育ち過保護にある孤独
団体で幹名も売り顔も売り
転落の過去振りかえる話題派手
かたくなな言い分手酌でききながし

大洲市　米沢暁明

箇条書よろしくたのむ子の便り
おちつきや牛は大地を踏みしめる
明けましてそう芽出たくもない我が家

今治市　月原宵明

乗用車の中から誰やら会釈した
玄関は開かずじまいの福寿草

県議選挙事務長となる
逢う人が裏切りに見え票に見え

岐阜市　市川鱗魚

学歴が廻り椅子にもある重荷
生酔いがきらいな板場の黙りぐせ
親馬鹿を孫の立場でみて笑い

東京都　池口呑歩

あたらしきよやたらちねはなけとかや
あたらしきよやいけにえのうずのなか
あたらしきよもうたかたのいのちかや

今治市　長野文庫

古梅園の五つ星かな墨の色
広告をして堂々と騙すなり
知恵だけは老いるにまかせ若づくり

川傍柳初篇研究（百十六）

前田喜代人　川端柳風
故岡崎重義　故高須啞三味
清博美丸　十府
藤井和雄　岡田甫

687　寺迄ハ共にうりやうるふりで来る

藤井＝寺を売ってまでお前を可愛がってやるよと、品川辺りへ這う和尚殿。「ふりで来る」で、内心はがっちりしてヂェスチャーだけのニュアンスがある。世の中は遊女もお客も「ふり」と「ふり」とのたぶらかし。

高須＝「うりやうる」憂うるで、「共に憂うる」は、すなわち今日の葬式を出した家の人々と一緒に「うれい」に沈んだ顔をして寺までは来たという句。それから先はどうなるかが、この句の言いたいところであろう。――なお古川柳の「かな抜き」は困ったものですね。藤井さんがこれをどう読んだか判りませんが「売りは売り」と読んだのでしょうか？

お寺をば焼鉢ぎりでどらはずし
相談をしい〳〵輿のあとを行き　八37

岡崎＝高須説ですっきりした。あらためてカナの読み取りかたに考えさせられた。

清＝「共にうりやうる」については、次のような句もある。

共にうりやうるでこし屋がいい値也　二〇・9

丸＝賛。

岡田＝同。葬式のあと吉原へ繰り込むのである。当時の新吉原は江戸の郊外の田圃の中だから、浅草方面の寺にいった時、それを利用して遊んでくる手合が多かった。

688　せめてうみ落すまで嫁置たがり　一甫

藤井＝川柳では、嫁と姑は、犬猿の仲で、

産まなければ産まないと姑いい
姑ばばまず孕んだが気に食わず

と云うところ、その結果、

母を殺すか嫁出すかと息子せめ
息子もやむを得ず、離縁を承知し、泣く泣く帰る嫁はいつか子を宿している。かくなっては、せめては孫の顔を見たくなるのも姑の人情だ。昔の姑のエゴイズムの結果のような句だ。

川端＝追い出すにしても孫の顔は見たいと思うのが人情。「にくらしい嫁が可愛い孫を産み」である。

高須＝いくら姑と嫁が犬猿の仲だといっても、それほどひどくはなかろう。礎解はすこしむごすぎる。柳雨翁は「里から連れて来た女中を、嫁が」と言っているが、どうもそれが隠当のようだ。花嫁が家事になれるまでと、可愛い娘のために実家から嫁につけてやる女中で、ある時期が来ると、実家へ帰るのであるが、早くも懐胎の徴、せめて「産みおとすまで」その女中にいてもらいたいと、嫁の心境である。初産なので――。

岡崎＝腹は借り物的な考え方からすると、藤井説もじゅうぶん成立するが、柳雨説の

置いておきたいものは「実家から連れてきた女中」とみる方がおちつく。

前田＝「嫁置きたがり」に問題がある。嫁を置きたがりと「を」が略されたもの（この句法、いくらでも例句あり）とすると、礎稿説となる。高須説が、このままだと正しいが、嫁と姑との常識的観念からすると礎稿の方をむしろとりたい。

清＝置いておきたいものに、「女中」と「嫁」の両説があるが、更に嫁の家にいる猫を加えてみたい。というのは

　嫁はもふ猫の身持ちを里へ遣り　傍三14

という句があり、実に、同じ家で人と家畜と同時にお産をすると、人の方は難産をするという俗説があるからである。引用句は妊娠した嫁がこの俗信によって、孕んだ猫を里にやるというものである。そこで主題句の解釈だが、妊娠した嫁に対し孕んだ猫を俗信通り里へやれという周囲の助言するにもかかわらず、子猫を産み落とすまでは置いてやりたい、産んでから里にやってもおそくはないと、猫を可愛がっている嫁を詠んだ句ではないかと考えるのだが。

丸＝「せめて」は十中八九不可能なことを強いて願う切実さをこめたコトバであるから、姑説（礎稿）や嫁自身（柳雨・清説）とは思われない。自分は嫁の亭主、即ち姑の息子の願望と解している。姑と嫁と不和で、すでに離縁ときまったが、折りから妊娠中、臨月も間近、せめて身二つになるまでは家におきたいというのである。

岡田＝諸説を大別すると「嫁置たがり」を「嫁は置きたがり」か「嫁を置きたがり」かの二つに問題はしぼられる。それによって句解も解決に近づくことが出来る。さてこの「せめて産み落すまで嫁置きたがり」の句の場合、やはり「嫁を」でなく「嫁は」の解と見るのが自然ではあるまいか。多年作句に苦労されてきた高須兄など作字の方の御意見を改めてお伺いしたい。小生は句は作らないながら、永年たくさんの句を新古を問わず読んでいた知識からすると「嫁は置きたがり」と考えている。もしこれが正しいとすれば、嫁が置きたかったのは、やはり柳雨翁のいう「里から連れて来た下女」、もう一つは清氏のいう「猫」のどちらかだろう。しかし猫は里へやってもまた連れてこられる。やはり「里から付いて来た下女」のような気がするのだが。

689　**よそでよくはたらいて居るぶしょう者**　　**桝水**

藤井＝説明の必要もない。よそでは人前があるので働くのみではなく、常に無精者よときめつけられていると「ままよ」とその名に安住して、そのまま通してしもう、その気楽さ。私自身そうであったし、今でも然り。したがってこの句は他人よりもよくわかる。

川端＝賛。よそのことする位なら、家のことも少しは…とグチられているところか。

高須＝面白い句で、よく見られる情景である。現代句にもよく詠まれる題材である。

　大掃除この無精者よく動き

岡崎＝自宅では全くの無精者であるが、よそでは見違えるほどこまめによく働らく奴のいることは、昔も今も変わらないようだ

前田＝われわれグループの見本に近い？

丸・岡田＝諸説賛。

倉林ひとみ著
「新川柳についての歴史的研究」
—剣花坊と革新運動—
序文河野春三。—卒業論文に『川柳』をとり上げ、現在相模女子大学国文科助手だが、この力作が川柳ジャーナル（一月発行）別冊として発行された。
（送料共三百円）
発行所—高槻市竹の内三二八—二、第七東和苑一〇一号、河野春三方川柳ジャーナル社。

川柳人葛飾北斎

東野大八

私の浮世絵趣味は昨日今日にはじまったわけではないが、名古屋市で開かれた北斎展には連日三日通った。バス、電車、地下鉄、入場料というコースをとって、一日は土砂降りの中を歩いた。会場に立つと、ウムと眼をむいて挙句に必ず陽のあるうちからコップ酒だ。そのアタマの熱い肩入れの程は、労力と出費の度合いには全く比例しない。それほど、私は葛飾北斎が大好きなのだ。それに続くは写楽。

浮世絵といえば「歌麿の前に歌麿なし、歌麿の後に歌麿なし」ということが俗説になっている。が私にすれば、歌麿の文字に代えて北斎の名を入れたいぐらいだ。勿論、歌麿も絶品であり、浮世絵の代名詞にふさわしい斯界の一大巨匠であることは認める。しかし、北斎には、彼ならではの味がある。要は万人からする好みの問題にちがいないが、風景からする浮世絵にかけては、文字通り「日本風景画家の富嶽」と絶賛する欧米の識者の声望に私は賛意を表したいのである。しかも、私にとって彼を一しおのものに感じさせるのは、彼は往時のA級川柳人であったという点だ。

—**大切な尿を見にくる小児医者**

本誌の生々庵先生もニッコリお笑いだろうが、今も昔も小児科医は、こどものはいせつ物がまずは診断の最も大切な目安なのだ。

—**山伏の野糞は梵字のようにたれ**

—**木魂して天地へひびく井戸屋の屁**

彼の川柳作品はとかく下がかった尾籠なものが多い。江戸期の生理は快食快便で、後者が健康の尺度になっていたのである。このことは、彼にすれば画室での仕事が中心であったので、当然下（しも）がったものが多くなったのであろう。快便こそ、木魂する屁の音である。

彼は六十五歳（文政八年）から、七十二歳（天保三年）の間に、彼の最高傑作である〝富嶽三十六景〟の大作と取組んでいる。彼の川柳作品はちょうどこの大作に終始した八年間に限られており、その前後には一句もない。従ってこの富嶽三十六景と川柳がぴったり一体を成しているわけである。彼の作品が百八十一句「柳多留」に載っているが、年齢からしても、柳多留の後半に当っていよう。

名古屋の北斎展で、三十六景中の最大傑作〝神奈川沖浪裏〟の大判錦絵を仰ぎみながら、あの「井戸屋の屁」の句が、巨大なシンバルの余韻の如く、天地に木魂するのを覚え、私は思わず莞爾とほほ笑んだものだ。

いまどきの七十歳前といえば、総じて去勢されたモルモットの如く、半ば塩ったれて厚生年金の額を考え、日向で孫の顔にヤニ下るという図であろうが、北斎ときたら彼生涯の超大作に取組み、ピカソやセザンヌをうならせる画境でハッスル中という次第だ。江戸期の老人としては、けだし抜群の壮健さだ。

飯島半十郎著「葛飾北斎伝」（明治26年版）の、彼の画像やその文中から、その人となりを想像すると、六尺豊かな偉丈夫で、容貌怪偉、耳はアフリカ象の如く両翼に張り、相貌は万事大振りで烏天狗のタッチで極めてエネルギッシュだ。本所の木場で木材人足と力比べをして、果ては喧嘩となり五、六人投げとばす武勇伝をやってのけたと思うと、版

木屋の初代江川仙太郎の職場で、浮世絵の毛描きの説明をやったが、その際、自分の頭髪一本を引っこ抜き、ノミでタテに二つに裂いてみせ、これで浮世絵の髪をかくのだと説明したそうだ。また、三味線糸で石臼を口にくわえてブラ下げる芸当もやってみせている。これらから想像すると、北斎は筋骨逞しく眼も歯もきわめて頑健であったらしい。こうなると男性としての象徴の方も、未だ微動だもせず、相当な使いでを発揮したらしく、吉原の句がしきりと作られている。その代表句

—千人の枕に憎い一字命

—突出しは杉本流ではやるなり

一字命とは刺ぼくろ（人工のホクロ）突出しとは、十五歳からお職になること。つまり禿（かむろ）修業抜きの急製女郎のこと。杉本流とは、楠正成の故事で知られる泣き男、杉本佐兵衛のことだ。

北斎伝によると、酒も煙草も茶もやらないとあるが、彼の画賛には「酔中筆す」とか「酔中乱筆」のサインを使っている。落合芳年は「拙を覆うの遁辞にて、画工中往々行う洒落なり」といっているが、さきの木版屋仙太郎は「先生は煮豆が好きで、よくこれを肴に酔っていた」と言っているし、北斎の門下露木為一は「酒と煙草と茶が好きだ」と証言している。私もこれほどの天才が木仏金仏で、あれほどの大仕事がやれたとは思えない。第一、酒も煙草もやれずにどうして吉原遊びの面白さが判ろう。（私などは酒とタバコとコーヒーのいわばセミ中毒患者である）

—芋はまだのど元あたりろくろ首

—河童のさらに豆ガニの居候

の句など面白い図柄だが、こんな幻妖なモチーフは、アルコールかニコチンの作用の効果によるとしか考えられない。

彼は生涯に三十回近くも雅号を変え、百回以上も転々と居所をうつりかわっている。容貌怪異で、頑健そのもののその体馳からあの雄渾活達なデッサンと画想が生れるべくして生れ出たのであろうが、いわばそうしためまぐるしい環境の変化が、富嶽三十六景に凝結し、その製作の潤活油の役目を川柳が果したのだとそう私は想うのである。

北斎がその九十年の生涯を押し包んだ巷間の江戸期は、黄麦紙と狂歌と春画調の浮世絵振りのメッカでそこに屯していったのが、狂歌師の重畳たる群像であった。四方真顔、恋川春町、大屋裏住、森羅万象、桜川慈悲成、朱楽菅江など、その戯作にふさわしいふざけた筆名がひしめき、その中から太田南畝（蜀山人）や京伝、西鶴、一九、馬琴、文左衛門、川柳等の後世に名を遺す連中が輩出していったのである。川柳人に馴染深い朱楽菅江（川傍柳主幹）は蜀山人の直門で、市ケ谷二十騎町のお手先与力、いわば柄井八右衛門の後輩であった。本名山崎景基（かげもと）で仲間のふざけ野郎たちも、身元を洗えばレッキとして身分の各藩江戸屋敷の職分方。町人とて一かどの商家の旦那衆で、出版屋大手もいれば木版彫方の名人格もいる。さては世をすねた学儒文人連といった態であった。北斎もその中の画人として、彩管のほかの手すさびに川柳で、浮世の狂歌師連のムードのヒッピー風に浸っていたと思われる。

「文政の末年、北斎翁が六十八、九のころ中風を患いしが、自ら柚子をもて薬を製し用いて大験あり、暫くして身体旧に復したり」とあるが、このころから台頭して彼の画才を脅やかしたのがほかならぬ風景画の重鎮安藤広重である。出版元や版木屋はこの新星の出現に刮目して、一斉に北斎を離れ、広重に傾倒していく。

「翁死に臨み、大息し天われにいま十年、然らずんば五年としての歳月を与え給え、この歳月あれば真の画工たるべし」

嘉永二年九十歳という江戸期では稀有の長寿を保ちながら、めい目していく彼が、愛娘阿栄に残した遺言がこれであったという。

「父が生前、川柳点を作りしときこそ、生涯の盛事なり」

と阿栄さんも父の死後、こう人に語っていたという。

—ぼんぼりで追手のかかるきりぎりす

—影清くそのままえがく窓の梅

—田毎〳〵月に蓋する薄氷り

北斎の、いかにも画人らしい川柳作品に右のようなのがある。彼にしてはいささか線が細く、浮世絵ならば清広か豊信あたりにふさわしい。私にすれば彼の面目は、やはり「井戸屋の屁」のオールトーキーである。

路郎賞
川柳塔賞

候補作品中間発表

自　四七年十月号
至　四八年一月号

路郎賞候補作品

北川春巣

夏座敷魚の額を泳がせる　西　いわを
子の嫁を捜す痴漢と云うなかれ　仲どんたく
どの顔も一対一の肩を組み　水粉　千翁
名人にされてそれから行詰り　太田　良子
サングラス人間逃避している気　神谷凡九郎
悪友へ未練の別れする子連れ　島居　百酒
おしろい花咲かせて縫物上手なり　岩田　美代
妻子ありて地下足袋臭う足誇る　槙田　英詩
石の値に金のねうちのない世なり　鈴木村諷子
阿呆になることも忘れぬ母達者　川上　大輪

西尾栞

夏座敷魚の額を泳がせる　西　いわを
云うならば空気二十五年の二人です　神谷凡九郎
耳打ちへ味方の顔という笑い　谷井　扇水
貧乏に勝てとは無情の第三者　飯田　悦郎
朝寝坊ですよと嫁に引継がれ　斎藤三十四
見破られそうで仮面のむずがゆさ　木村弥栄子
手をそえるどころかいきなり足ばらい　小砂　白汀
蜘蛛の糸恋にたわむるのもかかり　遠山　可住
鰻どんぶり鰻をあっちこっちやり　吉田　水車
美容体操ご飯の美味いのに困り　金井　文秋
きょう一日を笑わなかった守衛　谷垣　史好
お金持ち減るのがこわい日が続き　河内　天笑
妹の釣書を書く秋深し　野田素身郎

菊沢小松園

平凡なくらしの良さが解りかけ　奥谷　弘朗
抱き寄せる腕は仏の安らかさ　遠山　可住
ここまでが線と女決めたがり　宮西　弥生
十二月小鳥の水をまた忘れ　谷垣　史好
髪洗う妻が女に見えてくる　槙田　英詩
持ち過ぎたのか冷たい人になり　天正　千梢
きょう一日を笑わなかった守衛　谷垣　史好
合鍵の温くさに触れて女陥ち　江城　修史
紫を着るには心貧しすぎ　小出　智子
星屑の願いはせめて名が欲しく　槙田　英詩

若本多久志

大の字に炎えて仏の去り難く　高杉　鬼遊
顔知らぬ隣りの風鈴よく響く　宮尾あいき
早鞆の流れ寿永の哀史聞く　安平次弘道
また坂を越えて夫婦の歩が揃い　水粉　千翁
蔦植えて蔓のゆくえに夢を追う　河野　君子
砂時計将に淋しきものの果て　高津　徹也
よく稼ぐこはぜは男にはずさせる　有信新之助
母を呼ぶ声夕空を紅う染め　鈴木村諷子
叩きつける言葉の一つあたためる　正本　水客

結ぶ実は土のぬくみを疑わず　奥谷　弘朗
合鍵の温くさに触れて女陥ち　江城　修史
灯を消して妻と語るも秋なるか　越智　一水

川村好郎

新年のレール真っ直ぐ描こうか　大峠　可動
大の字に炎えて仏の去り難く　高杉　鬼遊
道のない道を夫婦だから歩く　宮西　弥生
叩きつける言葉の一つあたためる　正本　水客
腕時計はずせば枷の音がする　有信新之助
心すでに妥協している迎え傘　小出　智子
おんな坂風の指図で木の葉降る　香川　酔々
御近所が何を指折る岩田帯　大矢　十郎
惜しまれて死にたし長生きもしたし　金井　文秋
近視乱視色盲両眼が開いてても　神谷凡九郎

正本水客

莫座に寝て融通無碍を識るのなり　西　いわを
有難うて有難うて酔うより他はなし　谷垣　史好
この辻も千人針の記憶持つ　八木　千代
ゆっくりと廻りたい日もある地球　川上　大輪
皇后さまも女　ハンドバッグ提げ　不二田一三夫
台風禍この青空の偽善者め　高杉　鬼遊
デモ隊の歩道越しなるおでんの灯　吉岡　遇児
遍路ではないが心に鈴を持つ　三井　酔夢
ポケットの拳が僕に味方する　小幡　里風
紫を着るには心貧しすぎ　小出　智子
ひとりの寝酒しじまは限りなき　尼　緑之助
一刀彫りのごとく処理するおそろしさ　仲どんたく
白い息夜明けの山を温ためる　板尾　岳人

川柳塔賞候補作品

大坂形水

マニキュアのそろばん何んだか違いそう　谷　のぶお
子会社の社長名刺をそっと出し　西本　保夫
失対を養う草がちゃんと生え　伊藤　一郎
心にもない音を立て戸が閉まり　岸本豊平次
地図持って地図にない道行く二人　垂井千寿子
父の跡父は嗣がさず海渡る　松本　市郎
失恋のいつか白樺秋を告げ　小谷　葉子
嘘を言うときも鏡を正視する　ふきあげ虎城
嘘一つ包んで冷たい風となり　嘉数千代香
病窓の雲ちぢになりははになり　福田　陽山

戸田古方

ひとりでも生きられそうよお月さま　村井　酉合
糸切れた凧が自由を見失い　嘉数千代香
色があるかぎり花は咲きつづけ　武元　柳子
顔がよく見える鏡を選んどき　河野　幸子
仏さんだまっているから後になる　宮崎美津子
雷の遠くで聞けば丸い音　今西　寿子
正直が二三人いて座がもてず　関　美子
京都には京都の素足ばかりなり　武内　雅堂
自惚れが飛べぬ翼にしてしまい　樋口　一峯
母の袂を持っているという安堵　垂井千寿子

橘高薫風

美しく老いたる人の舞姿　日高　文甫
さし出して見せる青春持っていず　高杉　力
身の底のひととこ疼く曼珠沙華　三宅　不朽
失対を養う草がちゃんと生え　伊藤　一郎
共白髪で別居するとは思うていず　山田スミ子
車窓から天守が見えて下り仕度　真山　国彦
創業百年インスタントとなった味噌　堀口　欣一
片すみで見てる此の世がこわくなり　樫村ふみよ
京都には京都の素足ばかりなり　武内　雅堂
結婚も離婚も同じ判を押し　熊野　溪水

川柳 中山道六十九次（2）冨士野鞍馬

1 板橋

日本橋から二里（七、九キロ）
「江戸名所図会」に
中仙道の首にして日本橋より二里あり、往来の行客常に絡繹（らくえき）たり。東海道は川に差支へ多しとて、近世は諸侯を初め往来繁ければ、伝舎（はたごや）酒舗軒端を連ね繁昌の地たり。駅舎の中程を流る石神（しゃくじ）川に架す小橋あり、板橋の名ここに発るとぞ。
とあり、また「木曽路名所図会」には
此駅は中仙道の東極にして、町十町許あり。所々に花魁店前（うかれめてんぜん）にならび、紅粉を粧ふて、花簪をさしつらねて、美艶をかざる格子のうち、ゆきかふ旅客は歩をとどめて、あれをこれをと興ずるも多し。
と書かれてある。
江戸四宿の一つであるが、他の三宿（品川、新宿、千住）に比べて下位であったので、

板橋と聞て迎ひは二人減り　（五39）

板橋へ身内ばかりで旅迎ひ　五扇（傍五19）
いたばしへおくれば礼をあつくのべ　（安二満1）

と川柳にも詠まれ

板橋の迎ひ百ありやおてんつる　（天二松3）

と軽蔑された。その主な客は近隣の百姓で、
板橋へ大根の金を入れなくし　（一三26）
という川柳がある。
板橋をはさんで平尾、仲宿、上宿とがあり、本陣も脇本陣もあった。
縁切榎といって大きな榎があり、その皮を酒に入れて男にのませると縁が切れるという俗信があって、相当信仰があったようである。それも川柳に多く詠まれ、

医書にない和薬板橋妙にきき　横月（七六15）
板橋の木皮の能は医書にもれ　杜蝶（七九23）
遠い松よりも榎にかけてみる　卯麦（三三13）
—松が岡よりも
板橋の榎と女房心づき　古扇（一二一7）
板橋の榎出る気になる木なり　馬穴（七五37）
榎木をも三けずり半の馬鹿念さ　可津良（七六3）
大榎三下り半の願ほどき　金原（七一16）
板ばしへ三行り半の礼参り　蛙柳（一二一8）
—離縁状
近くに飛鳥山、王子権現があり、
叡山は三度王子は七度半　茂ル（一〇九2）
王子を守護に祭礼の法師武者　風松（九七6）
王子と水木名の高い槍踊り　株木（一〇九17）
—七月十三日祭礼
植給ふ桜も花の王子道　夢輔（一〇九7）
土器が追々に舞ふ飛鳥山　左一（一一二21）
飛鳥山毛虫になって見限られ　（初28）
飛鳥山ばたら三味線百で借り　（五14）
—桜の名所

2 蕨（わらび）

板橋から二里八丁（八・七キロ）此駅民居六、七町あり賑はし。と図会にある。また戸

田川へ二十四町（二六二m）とあり、板橋から来る間にこの戸田の渡しを渡るのであった。

秩父の留守に戸田川がとまれかし　雨譚（傍三26）

—姑の秩父三十三ヶ所巡り

春先は戸田も葭野の桜草　蛙柳（一四四18）

—戸田川原には桜草が多く咲き江戸へ売りに出た

春の野をせり売に出る桜草　如雀（三七30）

3　浦　和

蕨から一里半（五・九キロ）

東の口に月読宮、又稲荷のやしろあり、空晴たるときは、ここより浅間山見ゆる。

4　大　宮

浦和から一里十町（五キロ）

宿の入口に東光寺という禅刹あり。氷川神社は武蔵一の宮で素盞烏尊を祭る。社領三百石、六月十五日祭礼。この社を勧請して武蔵各所にあり。

5　上尾（あげお）

大宮から二里八町（八・七キロ）

此駅より川越道、岩付道、日光道あり。

6　桶　川

上尾より三十町（三・三キロ）

当駅三町ばかり民居相対して巷をなす。浄念寺という寺あり。

7　鴻の巣

桶川から一里三十町（七・二キロ）

当駅三、四町民家相対して巷をなす、其余散在して住居しける。葛城明神、勝願寺あり。

8　熊　谷

鴻巣から四里八町（一六・六キロ）板橋から十二里（四七キロ）ここで泊りということになる。

此駅三、四町民家相対して巷をなす、余は左右にも町あり、至って賑しき所也。

熊谷直実はこの地の人で、一の谷で平敦盛を討って発心、蓮生坊と号して、ここへ帰り蓮生院熊谷（ゆうこく）寺を創興した。

熊谷は扇をさして太刀を抜き　和文（五三2）

—扇で敦盛を呼び戻した

熊谷はまだ実の入らぬ首をとり　（二32）

—敦盛は十六才

直実は不承不承に高名し　（拾六9）

—敦盛を討つ

蓮生になり絹売の回向する　（一五10）

—この辺絹の産地

蓮生が馬上朝日が背へ当り　海月（八二30）

—西方浄土を拝む意味で乗馬で東行する時も西向に逆に乗ってあるいた

黒谷に坂東声の僧一人　株木（一五一36）

—黒谷法然上人のもとで剃髪出家

そうして承元二年（一二〇八）六十八才で入寂した。

大　阪　も

高鷲亜鈍

大阪も尾道も同じ闇のうちそと
開眼も失眼も天のなせる術
あっちこっちへゴミもてあそぶ箒
婆ちゃんに間違えられてとぼとぼと
アッピールできぬ盲の八ッあたり
目前の白さへ虫が一匹
しろいしろい無限の白さへ吸いこまれ
冠婚葬祭顔を出すのをやめとこう

鉢植に掌をつけ水を確かめる
声だけで用が果せるありがたし
失明にプラス中風で今日を生き
失明を後姿は気付くまい
とがめたてめくら負けずに云い返す
ちるぴるちるぴるちるぴるぴるぴる
薔薇の夜は妖しくチクリと指を刺し
水浴びせかけられ気息奄奄

同人吟

秀句鑑賞

——前月号から——

浜田久米雄

泣くとこがない大阪が捨て切れず

黒川紫香

過密都市大阪、そこは昼も夜も人間どもがひしめき合っている。だから人前もはばからず泣ける人は別として誰もいない処で涙を流したい人は泣く場所が見当らない。そんな人一杯の大阪を離れられないのだから不思議でそこらに大阪の魅力、よいところがあるからであろう。

ああしんど遂に本音がこぼれ出し

本田恵二朗

少々くたぶれてもなにくそと喰いこらえて来た壮年期であったがしんどい時にはああしんどと口に出すようになって来た老化現象である。疲れた時には疲れたと口に出して見るのが老化を慰めるひとつの方法かもしれないが。

連れた子に信号無視をとがめられ

野田素身郎

交通事故は毎日の数字が物語っていてまことに恐ろしいことで車がふえてゆくのと人間の不注意が改められない限り事故はふえる一方で人間の不注意は子供の頃からガッチリ交通ルールを身につけさせねばなるまい。この句は案外無関心な大人の頓馬さへの警句であろう。

末娘容子結婚

名付親伍健もみそなわせ給え

渡辺暁童

暁童さん身辺の句ではあるが今は亡き前田伍健先生に名付親になってもらった末娘の結婚に川柳により結ばれた数十年の柳魂のうれしさなつかしさがいつまでも続いているのである。暁童さんおめでとう。

股ボタン気づかぬこととは言いながら

山内静水

大変失礼をいたしました。ついうっかりしておりまして。このうっかりは人によって違うかもしれぬがある年代からふえてくるのではなかろうか。

風ふけば落葉は舞うてみたくなり

河内天笑

風が吹けば落葉は舞い上るのは自然の理である。が落葉の心になって舞い上る様を眺められる人はいくらいるのであろうか。すべからくこれ位は心のゆとりを持ちたいものだ。

だまされてあげるわ夫の嘘の下手

斎藤三十四

嘘の下手、嘘が下手、嘘は下手もうひとつピンと来るものが欲しい気はするが句全体は愉快である。見えすいた夫の嘘を目の奥で笑ってだまされてやる妻の気持。これも夫婦の愛情を示すひとこまである。

聴衆の拍手が票につながらず

久家代仕男

選挙演説会での拍手は少ないより多い方がよいが多いからと言って喜ぶわけにはゆかない。拍手している聴衆の気持と拍手とは違うからである。選挙のむずかしさはその辺にもあるのであろう。

散ることも出来ぬ造花を拭いてやり

宮西弥生

造花といえども心のこもった作品で散れずにほこりを被っている造花をいとほしむ純情さがうかがわれていじらしい。

古方手書き句集

送料共　八〇〇円

西尾栞句集　「水鶏笛」

送料共　六五〇円

残部少々・申込み順に発送

「秀句鑑賞と梅志句集」

送料共　六〇〇円

水煙抄

秀句鑑賞

——前月号から——

正本水客

生きがいを押しつけられる味気なさ　村井酉合

老人福祉だ生甲斐だと呼び声は盛んであるが、何か底が見えていて心から喜べない味気なさは如何ともしがたい。

ヤケ酒の限度妻子の顔泛ぶ　阪上十止庵

妻子の顔が眼先にチラつき出すと、盃を持つ手も引込み勝ちになってストレス解消は終る。

紅一点二点目が来てほっとする　安藤寿美子

よくある情景、微笑ましい女心、二点目が面白い。

日本の楽器の一つ大太鼓　秋月宏方

大太鼓も成るほど楽器には違いない。そして、これほど民族のなかにドッシリと根をおろした楽器もないであろう。

書きかけて立つこと多き年の暮　武元柳子

仕事は特にどうと云うことは無くても、何となく気忙しい暮れの気分が、立つこと多きによく出ている。

ワンボタン違えたまんまそのまんま　関美子

いかにもありそうな出来事を何気なく詠んで、何か人生を暗示しているようでもある。

尼さんの頭丸いの四角いの　堀口欣一

巧まないユーモアがあって、何とも微笑ましい。

家具でさえその場に慣れる日がかかり　樫村ふみよ

人間においては尚更であろう。結婚生活にしろ、職場の関係にしろ、言い得て妙。

俺だよと呼びたかろ遺体未確認　柳原静香

日航事故と前書があって、切実感が心を打つ。

つくづくとスペアーの欲しい胃を撫でる　吹田三郎

年末年始ともなれば酒の負担だけでも大変である。新潟の柳友の賀状に〝胃袋が四つある牛うらやまし〟があった。

顔洗う水が冷たい手のやせよう　松本市郎

肉が落ちて艶のなくなった手に朝の水はいかにも冷たい。鋭い感覚である。

もみじ迄揚げて自然をじかに喰い　平井露芳

自然食ばやりの昨今。〝じかに喰い〟が面白い。

話だけ聞けば共産党が良い　真山国彦

ソフトムードに共産党がなってから久しいが、年配の者には以前の暗さがなかなか拭い切れない。政界の清涼剤として云いたいことをズバズバ云う党の存在が必要であると思うが、それがキャスチングヴォートを握るほどに大きくなってくると、他の野党よしっかりせよという感を持つのは私だけではないと思う。

男の子何を送れど返事なし　沼本美智子

下宿でもして離れている男の子の感じがよく出ている。送れどは方言であろうが、何となくムードがある。

青空をころげころげてアドバルン　藤本佳女

ころげころげてという表現が青空にマッチして、いかにも爽やかである。

若本真彦（多久志）著
「凡愚のたわごと」
頒価　六〇〇円
送料　一一〇円

菊沢小松園選

岡山市　逸見灯竿

煩悩は春へ飜弄されつづけ
十字架の下にも赤い実が一つ
心細い傾斜支えたちぎれ雲
会者定離虹弓なりに頑張りぬ
遅いけど牛もやっぱり前に行き

島根県　堀江芳子

初子結婚

あす嫁ぐ娘を真中にして眠り
めでためでたでひとり娘をもってかれ
嫁がせて最も長き夜となりぬ
男なら酒で眠れる夜のしじま
労わってくれる息子が一人増え

岡山県　嘉数千代香

計画の通りに画く彩がない
ピエロの面脱いでわたしの涙拭く
その愛を信じて向い風に佇つ
日々貧しとてエプロンの白を撰る
子等育つ親をはなれていく音か

和歌山市　秋月宏方

わが家もう嫁がタクトを振り回し
生きているようにも見ゆるネオンの灯
サングラスかけてお寺の娘と見えず
隙のない人との話肩がこり
男くさい匂い落しに昼の風呂

島根県　谷岡芳枝

初日の出ひとはけ雲の詩を聞く
わらべ唄ブルドーザーが引きちぎり
故里は忘れた心を振り向かせ
幸運の日溜りばかり歩く人
大晦日妻の日銭がものを言い

鳥取市　佐々木静泉

量見の狭さへ大空のしかかり
三代の楽書のこる家に住み
置き物の牛生きかえる年が明け
年の瀬も亭主しめなわ飾るだけ

借家から抜けでた新居でトソをくみ　大阪市　小谷葉子

一周忌におもう（一句）

亡父慕う虹は素直な彩を持ち
瞳の底に沈むドラマを追いつづけ
春の花ひとりの体臭温める
時効ない慕情コンパクトに埋める
冬の思想で重なり合ってる枯葉　竹原市　三宅不朽

長女もうおくれとは言わぬお年玉
燈明をみつめる母となり給う
雪しんしん夫婦のお茶にしてくれる
アルバムのこのとき泣いてたなあお前　東京都　宮崎美津子

年末年始（二句）

来る年に身じろぎもせず六地蔵
お立ち台いつか燃やした血が叫び
病室の仮眠白髪が寄りそうて
業ひとつ繕っている手術室　岩国市　村井酉合

先生の倦怠チョーク感じとり
寒いからせめて心の火をもやそ
こころに灯ほのぼのともる初対面
子の前で言えぬ会話がやせてゆく　尼崎市　中谷利美

どこ押せばそんな音が出る脛かじり
当てもなく出て散髪をして帰り
禁煙が読めぬ訳ではないたばこ
親の身になれる道理はない子供　東大阪市　落合思月

手ぐすねを引く妻軽くあしらわれ
すぐ濡れる傘を乾すのもおんな
役職は名のみトイレも掃除する
風あたり承知で嫁いできたものの　大阪市　堀口欣一

遭難に無情な雪が降りつもり
おっさんのアイデア炭焼バーベキュー
六十を過ぎて赤らむ顔もよし
いずれみな一期一会の顔ばかり　氷見市　関美子

籠を出る小鳥は愛を知ったから
女妻母　おんなの道はジグザグに
ほほ伝う妻でも母でもない涙
横車押せるは夫の胸でだけ　大阪市　小谷清女

沈黙の夫婦に炬燵冷えてくる
飾りっ気ないのが夫物足らず
節くれた指が我が家の歴史秘め
お見合の前夜断る気の寝息　島根県　榊原秀子

雪映えの街新年の深呼吸
六角形だとは思えぬ雪が降り
雪の夜噺　ヘルン旧居へ冬が来た
子を送る尾灯の遠さへ風が泣く

青森県　波　ただお

改造にツノが邪魔だと牛は言い
ボクに歩調合わすでないと牛は言い
決断と実行地価で腰砕け
正論も吐けずに隅で歯ぎしりし

豊中市　安藤寿美子

おたやんの器量見定め飴を買う
お見合に付添う母も猫かぶり
向き合えば恋のはかなさしってる瞳
北風の中でますます片意地に

新宮市　川上富子

幸わせが待っているから廻り道
待ちぼうけ小さな今日にしてしまい
戸を閉じて老夫婦に音がない
唯一の武器を涙とする女

羽曳野市　麻野幽玄

寒椿落ちて心の傷を知る
苛立ちへ蹴る石もないターミナル
三次会そろそろ地球廻り出し
七草の二、三種類は庭に生え

守口市　野呂杜月

青空に大きく書きたい寿と
我が影と話してバスの停留所
金利では食えず相場も手が出せず
さじ投げた退院らしいとの噂

松山市　谷のぶお

正直に言ってしまった昼の月
錆びついてもう離れない離さない
もうあかん老人だから注射する
おでん食う凡愚の顔をあからさま

新潟県　高野不二

申し合せたような文句の賀状来る
はんぱ布の服がはやっている不思議
今の世にやっぱり金色夜叉の良さ
軍歌なら歌える酒ときらわれる

島根県　東原福子

老松の悠然として初明り
鳥啼く声も優雅にお元日
初春の恵みに溶けてとそをくむ
ここに来た運命しかと腹をきめ

鳥取県　林露杖

村雨にぬれて乾いて遍路笠
恋よ恋一期一会のものならず
七十の悋気に女の業をみる
燃え尽きた筈の乳房を焼く焔ら

大阪市　柳原静香

初春なるに我に燃えたつものがなし
主婦の座の足袋の白さも三カ日
倖せな日よ歌舞伎座に娘と坐り
詩情喪失久しく星を仰がない

米子市　増田竹馬

絶筆となった賀状に掌を合せ（正月二日友急逝）
十大ニュース我が家にもあり子沢山
孕ったらしい娘の初便り
赤旗を黄色に替えたら野坂さん

今治市　大本バット

早よ産めと隣の嫁をけしかける
許し給えや目で犯すミニ
雑音が余計聞こえる坐禅堂
駅の灯も消えて釧路に雪積る

新宮市　城丹鶴

お隣りもこの頃市況聞いている
カズノコを今年もにらんだまま過し
地球儀の裏からも来た年賀状
叱る身も心に残る傷であり

和歌山県　ふきあげ虎城

竹林を囲い明日香に重い過去
血縁が少なくなって梅漬ける
稼がねばならぬ屋台に今日も雪
恍惚になるのか妻がやさしなり

大阪市　鈴木生仏

見合ではいびきかくとは見えなんだ
冗談を本気に受けた里帰り
赤ちゃんの時から女泣いて勝ち
丑の春妻にも角がすこし見え

備前市　武内雅堂

楽屋裏スターのような子に困り
己が指燃えず枯野はまだつづく
後添いのはなし不潔と思う日も

東大阪市　坂東若芽

エプロンがこんなによごれた日の感謝
雨の音寝間のぬくみを楽しませ
よそ様へひょいひょい当る宝くじ

大阪市　阪上十止庵

汚れた胸を飾る勲章よく光り
出る幕がなくて晴耕雨読なり
歳だけで今日は上座にすわらされ

岡山県　武元柳子

五文字ほど書き添えてある年賀状
ほめ合うて妬心をひめた春の柄
故障機のなおらぬままに日の暮れる

岡山県　河村浄美

幸いに何でも食べてくれてます
たっぷりと若者の味マヨネーズ
過去として聞いてくれてる瞳の丸さ

仙台市　川村映輝

倖せな時間は経過忘れさせ
親の死に医者も人間涙する
新築の家で病んでるという便り
守口市　岸本豊平次

この家に明治が居るか国旗出る
誰にでも笑うこの子も親に似て
年始客聖徳太子に子は数え
今治市　蔦本昌道

合槌へ痛し痒しの口すべる
不眠症妻を冷めたい夜にする
人ひとり助ける嘘へ板ばさみ
鳥取市　両川洋々

まだ値切る妻を売場の隅で待ち
働いた手へ働いた汗が落ち
元旦の夢サイレンに引き裂かれ
鳥取市　有田鹿の子

良い年であれよと玉砂利一人踏む
池の鯉氷のカーテン冷たかろ
石仏の笑顔と出合う山登り
島根県　栂みどり

音たててくずれる心に亡父たつ
八起きして人間らしさを取り戻し
言うまいと思えど触れる停退後
大阪市　新川貞祐

ご回診今夜が瀬戸とドイツ語で
褒めごとのついぞなかった凡愚われ
島根県　安達小茶坊

かけらにも足らぬ善意が実る仲
一枚の紙にもちがう裏表
家計簿の赤字を里へ消しに来る
河内長野市　井上喜酔

高慢な態度素直な胸にくる
舞台裏聞けば怒りが込みあげる
グリン車の隣りは冷たい顔並び
愛媛県　小山悠泉

消費ブーム使える物も捨てさせる
其の日から重荷を背負う保証印
追うよりもトップ追われる身が苦し
橿原市　西本保夫

コースから外れに外れた平社員
其の昔辞表も書いてた平社員
自嘲して割り切っている平社員
和歌山市　島本泰子

しあわせの上につく字が欲しい今日
きめかねる良心だけが邪魔をする
顔のしわ目立ぬ位置に灯をともす
宿毛市　山本窓花

ふくよかな顔でちっとも溜めていず
笑ろて勝つ教えの心にようならず

腹立ちをすなおな水に悟される　大阪市　平井露芳

サングラスかけてスターが身を守り
聴診器ハートの悩みは聞きとれず
正月の凧はにっこり舞い上り　今治市　今井松花

此のタイプ専務夫人に向く美貌
逆らわず褒めて置いたら酒が出た
女房も魔女の素質が有り過ぎる　今治市　古野伶人

薄暗くなって書き初めやっと出来
落ちそうな付けまつ毛してレジを打ち
珍らしく意見が合うて飲み直し　今治市　原田輝親

正月も三日目にして消化剤
見るだけで買える見込みのない画廊
振袖に我が娘の尻を認識し　弘前市　小山内貞男

議題にない懇親会はすぐ決まり
此の先がわからないから夢もあり
怠け者賞められそうな世の動き　羽咋市　三宅ろ亭

成上がりの横柄さで座が白らけ
おれのせぬことをする息子気に掛かり
淡雪へ負けるものかと蕗のとう　藤井寺市　古結百水

向き合えば真実を云う舌ひっかかり
智恵の輪をもどけば元へ戻らない
つの描いて牛のつもりの子の賀状　寝屋川市　福富隆子

十二月財布も寝ては居られない
お互にぼけたぼけたと老いの春
達筆の災難賀状戻り来る　茨木市　日高文子

時々のへまが可愛いい妻となり
足ることを知って迫力欠けてくる
この人のケチが浮気を封じてる　氷見市　有磯涙月

改造の手初め地価がつり上り
雑談も喫茶喫煙公務です
公用も私用も公用車で済ませ　和歌山市　樫村ふみよ

石橋を叩いてる間に追い越され
帰国した嘉子演技でない涙
さかり場の灯を見るだけのゆき帰り　大洲市　堀内暁風

躊躇をも迎えてくれた自動ドアー
訥弁な夫へ代るよき内助
冷え切った恋へ口説のもう効かず　大和郡山市　森田カズエ

三カ日過ぎて禁酒をまた誓い
縫いあげがしたい娘のパンタロン
牛ねてたとこへガレージできあがり
名古屋市　大林曲人手

振りかかる火の粉と知らず愉快がり
凡人の鼻高ならず低くならず
紙吹雪地上に落ちる迄の景
姫路市　大原葉香

酒飲めば夜の時計が停止する
人並に場末の酒場ツリー置き
終点を求めず途中下車ぐらし
倉敷市　井上濤笑子

決断がつかず秒針とまらない
凡骨の俺れにも同じ春の風
七転び八起き笑いに涙光らせる
七尾市　松高秀峰

断絶の子が一人行く初詣
三カ日三猿主義の父になり
人間の弱さお金でひっかかり
鳥取市　藤本恵子

物価高言いつつスーパー人いきれ
ふる里の香りはらんで来たわかめ
時計屋の時計ちょっぴりおくれてた
尼崎市　小林文月

一月十二日老人クラブの初詣で
浪曲を掛けてガイドは一服し
ガイドでもトイレに馳ける小休止
竹原市　生信笑子

初めてスキーに行って
滑べるだけなのにスキーのままならず
ゲレンデの穴はおしりのサイズなり
大阪市　藤田頂留子

家鳩の自信なかなか飛び立たず
人生という片道切符にぎりしめ
須賀川市　平栗金太郎

公害禍メダカも住めぬ川になり
失対の人夫に惜しい姥桜
泉佐野市　大工静子

孫の旅線路の見える窓に立ち
親にまで拍手させ新郎と腕を組み
寝屋川市　江口度

拍子木がなってる去年は俺の役
暮迫り次第にけはしくなる眉間
寝屋川市　井上武松

寝正月出来ない妻は子に追われ
三カ日トラック何処へ消えたやら

堺市　栗本藤持

大寒に超ミニ我慢する若さ
また値上げ市場籠また軽くなり

守口市　樋口一峯

皆ハワイ　ママは残って犬の世話
女の相談室何か隠して居るみたい

兵庫県　高橋近江

飼育する気持ち幹事は酌ぎ廻わり
竹馬の高さに日増す子の自信

今治市　真山国彦

子を持った幸せという世話を焼き
話し中で掛からぬ内に気が変り

今治市　伊藤一郎

日本髪截せて初荷が走り過ぎ
昼風呂で時間をつぶす冬の雨

新井市　栗田清子

仕送りも後三月かとまたさびし
何事も母にならうと嫁の言う

鳥取県　福田陽山

梅の鉢紅白それぞれ色気出し
成人の日へ苦労の重荷殖えてゆき

島根県　岩田三和

子つばめは来年帰ってくる旅路
黒星になるから白票投じおく

大阪市　花田繁子

老人に明るいニュース丑の春
優待証持って散歩に羽が生え

大阪市　木村濁水

木枯をぶっつけて来る歩道橋
棄権したくせ速報板にかじりつき

鳥取市　藤本佳女

プレゼントちょっぴり野心を匂わせる
ウインドの指輪手頃と娘がねだり

鳥取市　藤本和宏

呆れてる人出の中に僕が居た
やんわりと大阪弁で妬いてくれ

鳥取市　藤本鎮也

下戸上戸どちらも不服な二合瓶
小うるさい先輩やっぱり腕が立ち

高槻市　山田スミ子

輪入数の子正月をうるおわせ
他人の子の自慢話を聞かされる

守口市　池川伸子

マイホームの夢は遠のく物価高
市長さんと知られずサンタもてている

鳥取市　大塚豊生

竹原市　古江雅鳳

ひとときのゆめだったのか炎消え

大阪市　松本市郎

老いてなお影は主のままに生き

大阪市　内藤ますゑ

隣席の香りへ気が散る参観日

大阪市　吉野志津

福の神おみぬぐいして恵方まち

大阪市　広畑賛平

墨痕あざやか寿一字の年賀状

大阪市　村島秀村

丑年の牛にさそわれ天満宮

大阪市　須浦いね

師走の風私一人に吹きつける

大阪市　今井隼人

子供から貰った金を孫にやり

戦後二十八年

北川春巣

歌うたうように戦後二十年二十年　春巣

昭和四十年、終戦後二十年にあたり、当時の総理大臣佐藤栄作氏をはじめ、国民誰でもが、「歌うたうように」戦後二十年を口にした。

その後、戦後二十一年、二十二年、二十五年…と経過したわけであるが、口調が悪いせいか、「歌うたうよう」にはこのことばを口にしなかった。今年は戦後二十八年である。

ところが、昨年十二月号の「時の川柳」に

人生は流転二十八年目の戦死　白光子

という句があった。「戦後二十八年」ではないが、昨年十月十九日のルパング島における小塚金七氏の戦死をうたったものである。横井庄一さんにくらべ、その悲運は涙なしには考えられない。

さて、戦後四分の一世紀以上たつ時と、戦中の用語も風化してきて、戦争体験の継承は困難になってくる、という実体調査が、戦後二十六年たった昭和四十六年に、東京の中学生を対象に行なわれた結果の発表があったので、お目にかけよう。その時の誤答例としては次のようなものがあった。

学徒出陣＝学生運動で、学生がバリケードの中から外へ出て行くこと。

赤紙＝共産主義の新聞。
国民学校＝国のたてた学校。
慰問袋＝空襲の時にかぶるもの。
学徒動員＝学生が学生運動をすること。
灯火管制＝着陸する飛行機に、灯で合図をすること。

ある中学校の生徒一、二、三学年各一〇〇名（男女各五〇名）の解答である。その正答、誤答の率は左の通りである。

原子雲	（正答60％	誤答4％	無答30％）
学徒出陣	（正27％	誤8％	無65％）
赤紙	（正56％	誤5％	無39％）
国民学校	（正16％	誤12％	無72％）
慰問袋	（正10袋	誤10％	無80％）
学徒動員	（正13％	誤13％	無74％）
灯火管制	（正8％	誤4％	無88％）
予科練	（正8％	誤31％	無63％）
スフ	（正8％	誤30％	無89％）

こんな生徒がおとなになった場合には

スフにしてあとは梯子で消える金　葭　乃

というような句は、決して理解できぬであろう。これらの生徒の父母は、大部分が昭和一ケタ生れだということで、徴兵検査は受けたか受けぬか、の界目である。おっと徴兵検査ということばももう分らぬかも知れない。

千人針（正18％　誤11％　無71％）

千人針胡瓜抱えた手でも縫い　路　郎

この句が分るのは　十人中二人ということか

復員（正23％　誤1％　無76％）

これなどまだ正答者の多い方であるが、無答者も多い。

復員の蟻も呆れるほど背負い　春　巣

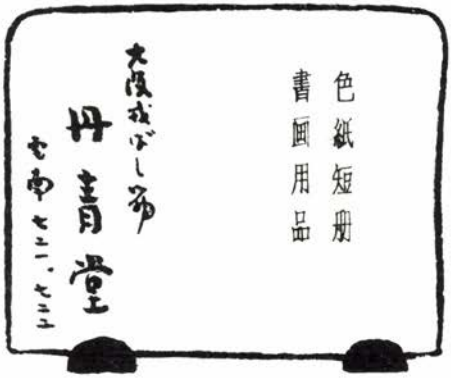
この句、分ってもらえるだろうか。

戦争用語だけでなく、一般にことばというものは時と共に意味やニュアンスが変っていくものである。同じ「時の川柳」誌十一月に美野路氏が、路郎先生の弓削駅前にある句碑の

俺に似よ俺に似るなと子を思い

について、「俺」ということばが気になる、と書いておられる。現在の話しことばとしての「俺」であれば、気になるのは当然と思う。しかしこの句は、発表されてから四、五十年経っているのではないかと思う。（ハッキリした発表の年代は調べていないが…。）「俺」のイメージも、この四、五十年の間に変ってきたのだ。「俺」という一人称の代名詞は、古く奈良朝の頃からあったことばで、はじめはむしろ卑称であったといわれている。それが年が経つにつれ次第に変化して、路郎先生の句の「俺」になり、それがまた現在の「俺」になったのである。最近の五十年ほどの間の変りようが、特に戦後の変りようが世の中の変りようと同じく、またスピーディーなのである。

句を味わう時には、その句の作句された時代をも考慮に入れなければ、真の鑑賞はできないように思う。逆にその句の発表された時代が分っていれば、句によってその時代の人情、風俗なども知ることができるのである。



《座談会》

頭で創る美と若さ

理容師 岩田美代　美容師 木村弥栄子

ペン・不二田一三夫、ゲスト・小谷葉子

フォト・板尾岳人

木村弥栄子さん（左）と岩田美代さん

―お忙しいとこをどうも。

岸南柳さんのお宅で毎月理・美容関係ばかりの方の句会があるのは知ってるのですが、最終月曜日というとぼくのからだが忙しい最中なので、その代表としてきょうお二人にご足労願うことにしましたが、本誌では毎年三月号はご婦人にご登場ねがっているのです。

ところで、美代さんは理容師さんですが女性の理容師というのはすくないのでしょう。

美代―そうですね、美容師さんと違いましてね。

―弥栄子さんのお店は〝富田林美容室〟というのでしたね。

弥栄子―ハイ、そうです。

―美代さんとこは〝男爵〟。

美代―はい。

―〝男爵〟とは、どこからそんな店名をもってこられたのです？。

美代―〝男爵〟というのは現在全国に七十六店ありまして、いわゆるチェーンになってますねん。

―ほう。それは初耳ですね。

美代―昭和四十五年十月に、この男爵チェーンが創設されまして〝脱理容〟がねらいなんです。

―脱理容？というと？

美代―たとえば薬局は、病気を治す薬を売るのではなく、健康を保ち、楽しく生活を送るための方法を売るように、理・美容も、髪が伸びたら短かくするのではなく、より若くより美しくするためにあるのです。これをわたしたちは〝脱理容〟というてます。

―なーるほどね、むかしのサンパツ屋さんとは云うことが違う。（笑い）で、お店の若い人は美代さんのことをなんとよぶんです？クイーン？。（笑い）

美代―店長が次男ですので、わたしのことを奥さんと云うてます。

―弥栄子さんとこは先生ですか。

弥栄子―そうです。

―むかしの髪結いさんは〝オカミさん〟でしたかな。

弥栄子―お師匠はんとも云うてましたね。

―あ、そうでしたね。ぼくはね、女房を持つなら髪結いさんがええなと思うたことがありましたな。

弥栄子―どうしてですか？

―髪結いさんを女房に持てば亭主は食いはぐれがないし、それこそ三食昼寝つきだし、嬶

（かかあ）天下また楽しでね。

美代—今でもそういうように見られてますので、わたしなんかも世間さまに気を使うてますねん。

—気にいらないお客もあるでしょうね。

美代—ありますね、お金はそっちのものやけど、技術はこっちのもんや云いとうなるくらい、うるさいお客がいますよ。

弥栄子—わたしとこへは、歌手や女優さんのブロマイドを持ってきて、このようなヘア・スタイルにしてくれいうので、一生懸命に仕上げたのに「この写真とは違うやないの」と、その場で、せっかく出来上がった髪をバラバラにしてしまう人がいます。

—非常識なヤツだな。

弥栄子—泣きとうなりまっせ。

—云うてやったらええのに、髪は写真どおりに出来上がったけど、お前さんの顔が最初からくずれてるのやから、コラどうにもならんと。

弥栄子—でも、お客様は神様ですからね。

—つらいとこや。ところで小谷サンなら、そんな場合、どうするの？

葉子—わたしにもそんな経験がありましたが、おうちへ帰ってからほどいてしまいますの。

—こういうお客さんこそ神様や。（笑い）

葉子—智子さんの句に、

—**気に入らぬ髪で一日落ち着けず**

この気持ちよくわかります。

—女にすれば美しくなりたいという欲望が強いからね。

葉子—客のほうも必死なのよ。

弥栄子—こちらも同性の女ですから必死なんですよ。

—昨年のことやけど、十六歳の女のコが理容所へ行って眉毛を細くしてもらったところ、片ちんばになったとかで、店主に泣いて文句を云った。

美代—そんなこともあるでしょうね。

—いくらわめいても剃ってしまったあとなので、どうにもならないし、あまりクドクド云われるので店主も言葉を返えしたのだろうね、その女のコは一応は自宅へ帰ったものの、どうにも我慢がならず、ついに家からナイフを持ってふたたび理容所へなぐり込みをかけ、とうとう店主を刺してしまった。

弥栄子—こわいこと。

美代—かないませんな、そんなお客。

—とにかく女は美しくなるためには生命を賭けてるのやろな。

弥栄子—そういうことでしょうね。

—だいたい、自分のご面相に自信のないのが一番うるさい客なのでしょう？

弥栄子—ま、そういうことになりますね。

—ぼくも若いころはうるさくてね、当時の人気スター鈴木伝明（松竹の第一回作〝路上の霊魂〟に主演、その後日活・松竹・不二映画を転々。〝明大の学生時代には百の水泳日本記録保持者〟が天然パーマーだったので、あのようなウェーブにしてくれと月のうち十回はサンパツ屋通いをしたものです。

美代—ええお客さんですがな。

—ところが現在、このアタマ三か月ほったらかしです。こんな客ばかりやったら理容所は食うていかれへん。

美代—若い人でも二た月か三か月目に一ぺんいう人が多いのですよ。

—そのかわり若いころから現在でも、料金分だけチップをはずんでますから、料金の倍払ってるわけです。

美代—もったいない。

—貧乏してるくせに、ヘンなとこでミエをはるんですな。

葉子—だいたい不二田さんは親分肌なんですよ。

美代—実は、チップをはずんでくれるお客さんはスグほかの店へ行きはりますね。浮気しはるのですよ。その点、料金だけより払わ

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般
合資会社 西出螺子製作所
大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (761) 三四五一—四
夜間 (762) 四四〇八

葉子さん（左端）と弥栄子さん（右端）の髪は流行のアップ。中央左は一三夫、右は美代さん。

ない人は永つづきがしますね。

—ぼくの場合、髪を伸ばして四十数年になりますが、まだ理容所を五軒よりかえてませんよ。

美代—へー、四十何年間で、たった五軒よりかえてはりませんの。

—店主が死んだり、店がつぶれたりしたから五軒かわったけど、あたりまえならその店一軒で来たはずです。

美代—義理堅いええお客さんですね。

弥栄子—よっぱどそのお店が気にいったわけですね。

葉子—気にいったというより、不二田さんのペースにまきこんでしまわれるのと違いますか。

—左がわの頭髪だけが横へ伸びるとか、ぼくの毛のクセを云って、そこのマスターを専任にしてしまう。そのかわり料金だけのチップをはりこむわけです。

美代—料金で思い出しましたが、奈良県の千早村のある理容店の話ですけど、そこのお店のカベにAさんは千円、Bさんは八百円、Cさんは五百円というように、お客さんからいただく値段表の張り紙がしてあります。

弥栄子—それぞれのお客さんの値段が違うの？

美代—お相撲の番付けみたいにね。

—変ってますね、それは。

葉子—さしずめ村長さんなら千円。

—ぼくのような貧乏たれは五百円。

美代—わたしもあんな料金表を見たのは始めてですわ。

—どうせ安い人のは手を抜くのだろうけど。

美代—愛隣地区あたりで二百円、三百円というのは数で勝負するため手を抜きます。だからアレで結構、たっていくのです。

—でしょうね。

弥栄子—わたしらの同業者仲間でも千円のところもありますが、若い人はやはり二千円以上の店をえらびますね。

美代—うちへ来るお客さんでも、わたしでないと気に入らない人もいます。

—人が代わると頭のカッコが変ってしまうので、ぼくらも専任の調髪師にやってもらうわけですよ。こうも毛が薄くなってしまうと、いろいろ注文つけますが、正直、誰がやってもこんなのどういうことないのやけど。

弥栄子—お客さんに満足していただかなお金とれへまんからね。

—それがサービスというもんなのですね。

美代—生まれてまもない赤ちゃんのうぶ毛を剃るときは気が張ります。サービス以上の注意をはらいますよ。

弥栄子—わたしとこは赤ちゃんはこないけど。

—生まれたての赤ちゃんがパーマにきたらたいへんや。（笑い）

葉子—一栄さんの句に

—云わずとも齢に合わして結うてくれ

というのがありますけど、ここのお店はサービスもよさそうですし、お客の方も満足してらっしゃるようですね。

美代—お客とこっちが何か通じるものがあると気持ちよく仕上がりますね。

弥栄子—それはほんとです。

—これはサービスではないけど、よく落語や漫才のネタになってるものに、

「オッサン、そんなきたない手でサンパツしてくれたんか」と客が文句をいうと、

「お客はアンタがはじめやからまだ手を洗ろておまへんね」（笑い）

—髪洗う上で床屋は手を洗い　　文　久

美代—おもしろい川柳ですね。
—番乗の故文久さんの五十年ほど前の作で、もうこんなおもしろい句が出なくなった。
葉子—操子さんの句に、
—**いっそもうかずらにしなと云うプラン**
このようにカズラ時代がくると美容師さんはこまりますね。
弥栄子—実際にカズラ時代は来てますよ、とくに婚礼は日本髪が多いのでカズラばかりですからね。
葉子—着付けなどは美容師さんのお仕事なんでしょう。
弥栄子—そうです。でもわたし自身のことになると和装の場合、ひとりでキモノをよう着ませんね。
葉子—あら、どうして？お客さんの着付けはなさるのにご自分のはダメなんですか。
美代—きょうも、ここへ来るのにわたしが着せてあげましてん。
—自分を着付けしても金がとれんからね。（笑い）
葉子—男性の美容師がいますけど、どうなんです、技術面は。
弥栄子—男性の方がうまいです。女性は結婚してしまうとやめる人が多いので熱の入れ方が違います。
—どの職場でも、みな同じですね、プロ意識が違うのだな。
弥栄子—男性は力が強いし耐久力があるでしょう。この点でも女性は男性美容師に勝てません。
—女性のお客は、男性の美容師のほうがええのと違いますか。ハンサムな美容師ならそこから恋も芽生えるだろうし。
弥栄子—そこまで発展するとこまります。
美代—わたしの句に、
—**ハンサムな彼が私を疲れさせ**
この句のように、私もおじいちゃんより若い人のほうがええもんね。
—わかりますね、その気持ち。コペンハーゲンにね、全裸に近い女の理容師がいてお客が毎日行列するそうな。
美代—全裸に近いって、たとえばストリッパーのようなですか。
—雄大なるボインをむき出しにして客の顔を剃るらしいが、こいつはイカスね。
美代—えらい時代ですな。
—日本もやがてそんな理容師が出ますよ。キャバレーやサウナあたりの中で営業する時代がきっと近い将来くる。
美代—そうでっしゃろか。
—明治四年八月九日にザン髪令が出たのやから、ことしで理容明治百年になるのかな。
美代—へえー、日本の理容の歴史はもう百年になりますの？
—松本剛著の〝広告風俗帳〟によると、明治五年三月の名古屋新聞に、
「東京府下結髪店およそ三千余軒あり、近来紙格（しょうじ）に〝英仏髪ハサミ所〟と題し、店前に赤と青の捩（よ）れたる棒高さ九尺ばかり、いただきに金の玉を付したる看板を建てたり、定価新規は金百疋、刈り込みは一朱ずつなり、府下住人概して八分は散髪なりと。」
美代—英仏髪ハサミ所とは、今の理容所と

一分間の柳論

傍島　静馬

凡そ世間にわが子を愛しく思わぬ親がある
だろうか。句会で自分の川柳を披講されても
一向に気付かず、何度も読上げられるうちに
ふとノートを見てからやっと呼名する人があ
るが、こんなに時間をかけなければ自分の作
った句が判らないのだろうか、おざなりのそ
の場のがれの句ならいざ知らず、仮にも句会
に出すほどのものなら相当の自信作と思うの
だが、こんな人の気持ちが判らない。
句会では一応句筆は統一されているが、地
方などからの投句中には、手帳を引裂いた小
さな紙片に誤字、当字などお構いなくなぐり
書をしたものがあるが、これは苦心して作っ
た自分の句を冒瀆するものであり選者泣かせ
でもある。すべからく自分の生んだ句が可愛
いければ、一応辞書を繰るぐらいの努力を惜
しまず、正確な文字を叮寧に一定の句筆に、
さもなくば、せめて垢のつかないキリッとし
た紙を用うべきだ。わが子がいとしければ愛
しいほど、川柳を愛好すればするほど。

いうことなんですね。
―当時のチョン髷の落とし賃が二十五銭で、米が一、三キロ（約一升）三銭七厘やからざっと米価の七倍がサンパツ賃ということになるけど、いま、お米いくらなの。
葉子―一升、二百円ぐらいと違いますか。
―若い人の調髪料が千五百円ぐらいでしょ、ちゃんとすると。やっぱり七倍ぐらいかな。
ついでに当時の話をもう一つ。男の断髪をまねて女も盛んに断髪が流行してね、これには政府も驚いて罰金制にした。
美代―その時分に、もう断髪する女性がいたのですね。
―全部ではないでしょうが、いつの時代にもそういう女性がいるものですよ。
弥栄子―どれくらいの罰金ですか。
―六銭二厘五毛から十二銭五厘ですが、街を歩いていて警官に見つかるたびに罰金をとるのは無茶やいうて、髪の毛の伸びるまでの日数を見積った処罰済みの証明書をもらった。
美代―外出する時、証明書を持って歩くわけですか。
弥栄子―いま、みなに断髪されたら、わたしとこ、どうなりますの。（笑い）
―〝男爵〟が儲かる。（笑い）明治末期に流行した『まがいいソング』という俗曲ふうのうたに〝さざえの壺焼き、なんてマがいいんでしょ〟というのは、頭の上に高々と結った二〇三高地といわれた髪型で、流行もリバイバルになってきましたね。
美代―プロのわたしが調べてこないかんのに、みな先生に教えていただくやなんて、えらいすみません。（笑い）
―髪かたちも時代ともに変わったけど、今の人はめぐまれてる。
葉子―どういうようにですか。
―むかしの娘さんは桃割れ、ほら夢二えがくあの髪かたち。奥さんは丸髷というようにだいたいきめられていたので、オデコの出た人や、ちぢれ毛の人、赤毛の人は日本髪には泣かされたらしいね。それが今では、どのような人にも向くような髪かたちで個性を生かせるからね。
弥栄子―それはたしかですね。
―ぼくとこの二番目の娘がはじめてデートしたとき、美容院から帰ってきたものの、そのまま寝てしまうと、せっかくの髪がくずれてしまういうので、とうとうタンスにもたれてすわったまま一夜明かしよった。
弥栄子―こういうお客さんがおられるとはありがたいですね。気に入らんいうてその場でバラバラにしてしまう人もいてはるのに。
美代―こと、ヘア・ファッションともなるとお客さんも必死やから、こっちも必死にやらないけませんな。
―必死でおもい出しましたが、ぼく、その日急いでいたので、専任のマスターが他の客にハサミを使うてたからそこの従業員に顔からやってもらいました。イスへねかされて、白い布に包まれたわけだが、顔に石鹸をつけたまま、一向にカミソリが顔へこない。何をしてるんだと目をあけてみると、ぼくの顔の上で日本剃刀がピストンのようにはげしく動いている。
美代―どうしたのです？
―剃刀を持ったまま〝てんかん〟を起こしたのです。ぼくの顔の上で。
弥栄子―ま、こわい。
―うっかり声を出して、グサッと顔をえぐられたらそれこそ目もあてられない。
美代―で、どうしました？
―もう、どうともなれと目をつむって覚悟しましたね。するとマスターが気がついて、そのまま裏へ連れていって水をかけたらしいがホッといのち拾いをした気持ち。
美代―そういう病気の人は試験で落とされてるはずですけど。
―はじめて発作的に出たらしいのですね。その翌日、もしクビにされては気の毒だと思って、その理容所へ行ったけど、もうクビになったあとでした。子が二人もいたのにね。
美代―あたりまえですがな。
―さて、ぼくばっかりしゃべってるうちに、そろそろスペースもなくなったので、川柳からみた髪かたちをひと言。
美代―**ニューレザー今きた客をためし斬り**
―一現のお客さんは気の毒やね。
弥栄子―**細腕の過信が女を忘れさせ**
―しょうむない男が多いからね、独身のほうがカシコイですよ。
小谷さん、コーヒーを追加してこいらでおひらきにしましょうか。どうも長い時間ありがとうございました。

きのう・きょう

本多柳志

◇昨年、革新系の某川柳社で記念事業として、作品の募集をした。そして其の入賞句がはなばなしく発表された。正直いってそれら作品の多くは、私共伝統派の作家には何とも訳のわからないものであった。たまたま番傘新年号の巻頭で同誌主幹近江砂人氏は、これらの作品について「卒直にいって、私は其の作品を読んだ時、せめて句意だけでも感じとりたいと思って、何度も繰り返して味って見た。しかし、私にとっては、まるで抽象画の前に立った時のようなもので、批評する、鑑賞する視野を持つことができない。このような作品に川柳というレッテルを貼り通用させようと考える作者、主催者と、とても川柳界の同志として行動を共にするわけには行かない。私はそのようなジャンルを持った抽象川柳は、私達が精進している川柳とは相容れることのできない作品で、私たちはそれを川柳と称えることに躊躇する。」と極言されている。

◇偶然の一致と思うのだが川柳塔一月号の一分間の柳論の中で川村好郎氏は「ピエロ抱く鳥に止る赤い鳩」を例句に挙げて「頭の悪い私は読んでいるうちに気が狂いそうになる。誰にでもわかる句は昨日の川柳だそうだ。川柳の原点から出発し積み重ねられてかく展開されてゆくなら諒解されようが、初心者の付け焼刃的なこんな句に接するとき私は寒気を催うす。こんな句が明日の川柳でなければならないなら、私は川柳界から脱退したい。」と酷評も痛烈である。

◇砂人。好郎両氏は人も知る柳界の巨石であるが其の思考において、柳志と意を同じゆうすることがとても嬉しいので、きのうきょうとしては少し長くなるが序に次の一文を照介したい。番傘同人福島郁三氏の昨年八月号の番傘誌上での、或の革新句（敢えて川柳とは言わない。柳志）についての感想である。

「選者の一人が、選句を読み直していると、作者に作句意図をただしたくなることがある。作者の表現したいものと、第三者のうけ取り方との間にズレがあると思うからである。作者は自分の作品には責任をもってほしいと思うと同時に、選句発表をお座なりのものにしたくないからである。」といって

おんな神に叛きつくしを持ってくる

この作品の作者の自句自解を照介している。男と女は目的もなく都会の人ごみを歩いていた。不意に女が「家の近くにつくしがあるの、芽を出す頃よ。摘んで行きましょうか」男はなんとなくふるさとの山を思い、神はあるのだなと思った。女は又「おいしいのよ、もって行きましょか」男あわてて「いらないよ好きでないんだ」と答えて歩きはじめた。女の気もちは嬉しかったが男はつくしをそっとして置いてほしいと思った。是を表現したのがこの句だというのである。全く唖然とせざるを得ないではないか。

◇そうは言っても柳志は凡ての革新作品を否定するものでは決してない。音楽、絵画、工芸、活け花、詩文学何にでも、マンネリ化した伝統にあき足らず、其の枠からはみ出し度くなって、革新と構えて新しい路にさまよい出すものであることも解る。中国の古い言葉に「格物致知」というのがある。朱子によると「格は至の意で、物の道理をきわめつくして、後天的の知を最高度に到達させること」としている。格に入って更めて格を出てからの所謂「格新」なら人の心を打つ革新句も生れよう。初心の碁打ちが称えて天元に一目置いたところでどうなろう。あのような作品が革新川柳と称して、敢えて柳界へしゃしゃり出ることについては、ひょっとしたら既成川柳人にも一端の責任があるのではなかろうか。詳しくは考え深くは省みる必要があると思うのだが、どうだろうか。

書道展読めないのから売れて行き　柳志

名医が三人寄れば―左から中島生々庵主幹、小川静観堂氏、福井野迷路氏

第20回 大萬川柳大会

S48・1・28 会場 割烹大萬

大萬川柳大会のタイトルは〝春は大萬川柳大会から〟ときまっていたが、ことしは、この大会がすむとスグ鉄筋三階建ての、新しい大萬になるため一月二十八日の開催日となったのである。

二月号校了後、また食い過ぎでちょっと体調をくずし、会場入りが一時間ばかり遅れてしまい、好郎氏にご心配をかけてしまった。ひょいと会場を見て驚いた。出席七十五名は新記録である。投句十七名という盛会だ。

毎年同じようなことを書くが、大萬川柳大会の特長は、川柳塔幹部総出席という社を挙げての強力なる協力ぶりである。路郎先生と松江梅里氏の遺産には違いないが、これを今日の新記録の盛会にまでも盛りあげたのは川村好郎氏のお人柄によるものである。そして好郎一門の方々の蔭げの力も忘れてはならないであろう。

司会は極め付き栞氏、ご存じ天下一品の名調は云わずもがなである。開会の辞の多久志氏がおくれられるので閉会専門の小松園氏がピンチ・ヒッターに立たれたが、なんのなんの開会大家の弁は満場を圧する名調子だったことは大ホーマーである。

生々庵主幹もやや体調をくずされていたが元気に柳話をされた。信仰家医博は毎日仏壇へ手を合わされるが、はからずも今日は梅里氏のご命日だったとか、さわやかなお話であった。

挨拶に立たれた好郎氏は、例によって謙虚に今日の盛会は皆様のご協力と梅里氏やご遺族の熱意によるものと、深々と頭をさげられた。前述の三階建ては〝川柳道場〟にすると生前、梅里氏の夢を令息克己氏が正夢にされることを好郎氏によって明らかにされた。

克己氏も謝辞に立たれ、心なしか階段のすみで梅里氏未亡人の有りがた涙の光るものがあった。

遠来倉敷勢はじめ大挙のご出席者を紹介、満場の拍手にいよいよ大会の幕あきだ。

閉会の辞で多久志氏がいみじくも述べられたように、披講される句のレベル・アップは大萬川柳行進曲にも似て、柳界のバトン・トワーラーの役目を果たしてもらいたいものである。

特筆大書するものに野迷路元海軍中将・静観堂元陸軍大佐（ともに軍医）のご出席だ。みずから静観堂氏の副官と称する新之助氏が伊丹まで送り迎えする柳情はほほえましい。

三林坊氏と記者が語りあったことだが、川柳たましまのご精進ぶりは驚嘆に価いするものがあり、事実きょうの三才入選を見てもわかるように断然他を圧していることにお気づきであろう。

さて、スペースもあまりないので、第二部にペンを進めよう。司会が柳宏子氏になる。

川柳塔演技陣と倉敷名匠連の合同競演となったが、まず前座を相つとめまするは、これはまた豪華きわまるもので、松竹芸能の看板奇術、ゼンジー中村の高弟、村田瓢太氏の奇術である。氏は〝関西奇術教室の校長〟でもあり、すでに何回かテレビ出演の実力者でもあってこれはプロ級である。氏の演技に協力する梅里氏のお孫さん、泉ちゃん（小学六年生）のピストルで鳩がとび出す仕組み、音のほうがあとで鳴るご愛敬に会場は喝采。

アッと驚く為五郎はもう古いが、驚きましたね、田中好啓氏の至芸には。

太郎冠者よろしくのいでたち、服を裏向きに釣竿のかわりに箒を肩に、その先端につるされたネクタイを鯛で落とす洗練されたこれもプロ級のものだ。しかもセリフが全部即吟という凝ったものである。

香川県代表という三井酔夢さんの日舞は名取りの手さばき足さばきは定評のもの。

小川静観堂元陸軍軍医大佐八十四翁がみずから兵庫県代表として出演、三十九年前に中之島公会堂で先代右団治や雲右衛門と共に一席持ち、当時の朝日新聞にこっぴどく叩かれたという因縁つきの〝新平家〟を直立不動でうたわれ勇ましい軍人魂？を披露された。

小野克枝さんは倉敷陣ただ一人の紅一点だが、その人気は素晴らしく、なんとしてもベスト・テンにはいるよう大阪陣は応援したものである。三才に三句入選の余勢をかって、小柳ルミ子に聞かせたかった〝瀬戸の花嫁〟も好調そのもの。

垂井葵水氏が三味線を使っての無法松でも打てないバチさばき、いや箸さばきの乱れ打ちは正に名人芸である。（そのほか紹介できなかった諸氏にはおわびいたします）

ペン・不二田一三夫—フォト・板尾岳人—

（三才と細吟のみ）

兼題「前進」　**笠原　吸江選**

経写す心は前を向いている　水　客
前進の旗大空の深さ知る　多久志
踏みしめて牛の歩みに無駄がない　朝　二
一歩前進やっと二人は手を握り

兼題「梯子」　**小幡　里風選**

盗み聞き気付かれている梯子段　克　枝
書留へ屋根から返事する梯子　鬼　遊
梯子からおりて大地のあたたかみ　三林坊
梯子車の高さをビルに見下され

どなたとどなた？なんて聞くほうがヤボですよ、いずれも顔の売れた方ばかりである。ホラ右端に好啓氏、オヤその上が三林坊氏。女性は克枝さんと酔夢さんだね。

兼題「二十」　**河内　天笑選**

もう君におとき話はない二十　俊　夫
成人式扱いにくいのも列び　柳　志
二十才逆光線へつっ走り　岳　人
二十年先をうかべているおしめ

兼題「手加減」　**松下　梁水選**

敬老という手加減が気に入らず　柳宏子
陰で泣く母で手加減などしない　克　枝
手加減をすればこころを風が抜け　小松園
手加減はすまいこの子に明日がある

兼題「奥」　**三井　酔夢選**

奥の手がないから凡人らしく生き　梁　水
奥の手は涙女が勝負する　里　風
逢えば足るこころの奥の灯が赤い　可　動
人恋いの鈴は心の奥で鳴り

席題「燃える」　**正本　水客選**

燃えるもの別にくくって行くバタ屋　玲　人
燃えろ燃えろ男の端くれという私　雀踊子
ヤングパワー燃えて歪んだ道走る　里　風
燃えるものまだあり戦禍おさまらず

席題「ボタン」　**橘高　薫風選**

ボタンかけ違えたままの夫婦かな　克　枝
青年の主張ボタンをはめ直し　梁　水
ボタンつけてあげて身分が違いすぎ　三林坊
馬券裂いてるMボタン外れてる

ピカ一

高津徹也選

ピカ一は居ぬ団結の勝利です　悠泉
本当はピカ一の座につかれきり　旭童
ピカ一の出生という低い屋根　昌道
ピカ一に謎かけられたアラモード　儀一
ピカ一が乗れば田舎のバス黙る　本蔭棒
ピカ一の頃の話を子に聞かせ　度
目に見えぬとでピカ一研ぎつづけ　白汀
花嫁をピカ一にしてつつがなし　可住
ピカ一に切れる男に恋がない　可住
ピカ一の歌手を頼んで来たドラマ　不二
ピカ一は派手な衣裳と濃い化粧　宵明
ピカ一で家業を継がず遠く住み　鎮也
同級のピカ一だった汚職記事　輝親
ピカ一の息子養子に狙われる　松花
ピカ一に育てた人がダニになり　一郎
ピカ一の孤独は日記だけが知り　バット
ピカ一をでっち上げてる宣伝部　里風
ピカ一の江戸城中で寝てみたい　陽山
ピカ一を目で追うだけのバーの隅　代仕男
談合がこじれピカ一担ぎ出し　代仕男
ピカ一の唄が末席から流れ　英詩
ピカ一の妻と信じている平和　弘朗
討論会冴えた意見で座を占める　静泉
ピカ一といわれ微熱をおして出る　素身郎
自他共に許すピカ一の高い鼻　七面山
ピカ一の妻とは別に浮気する　木魚
ピカ一と云われた過去の雄弁家　金太郎
ピカ一の哀れ仮面がはずせない　梁水
ピカ一というふれ込みに肩が凝り　梁水
アルバムにピカ一だった妻がいる　カズエ
ピカ一を意識しているつけまつ毛　カズエ
ピカ一をその他大勢差し上げる　千翁
ピカ一が居って平行線乱れ　千翁
ピカ一の意見は千切り千切り出し　扇水
ピカ一を出し勝つ顔になるコーチ　十止庵
背のびせぬピカ一だから怖がられ　白水
ニクソンをびかいちにせぬ焦土戦　章雅
ピカ一は末席に来ず苦い酒　杜月
佳
ピカ一の記事がうれいすべり込み　白水
ピカ一の隣りで今日も気が疲れ　静泉
ピカ一が小さな恋を実らせる　古方
ピカ一へうっかり乗った後始末　暁明
断ってからピカ一だったなと思い　翁童
人
ピカ一の帰宅は星を仰いでる　重人
地
ピカ一を目ざして青春をいじめ抜く　十止庵
天
ピカ一といわれなくても咲いた花　木魚
軸
本当のピカ一だった再起する

迷い

大江秋月選

人妻の色香へ若さちと迷い　鎮也
迷うも迷わぬもこうより致すすべがなく　古方
家並の同じ団地でまた迷い　和宏
手遅れは迷うたはての外科手術　章雅
巣立たせて子の行く末に迷うぐち　佳女
結納へもう迷うまい迷うまい　可住
迷いからさめて人相まで変り　軒太楼
迷いから醒めて兄弟手を握り　金太郎
迷い捨てて家業継ぐと決め　三十四
トランプで独り占う娘の迷い　カズエ
籠を出た小鳥が迷う空があり　菩句
子の進路まだ迷うてる親の見栄　代仕男
親の方が迷って受験校決まらない　隆子
政治家の迷いは善処で場を逃れ　ろ亭
ラーメンを食べて迷い子寝てしまい　伶人
どれ着よか迷い乍らも楽しい日　一郎
迷いに迷った妻のパンタロン　敏

再婚へ迷いはじめた一周忌　葵水
買うて来た柄を女はまだ迷い　悠泉
人生は多岐古稀に迷いの眼鏡拭く　貞祐
コンパクト迷い断ち切る音で閉じ　洋々
迷いから さめて茶漬の味を知る　豊平次
迷い猫飼うか飼わぬで揉めている　綾女
恍惚の人交番へ迷い込み　肖二
もう一人のわたしは迷うてないと云う　千翁
海へ来ていま迷いから醒めた顔　里風
迷う目にやたら易者の灯がうつり　十止庵
ふぐ料理まだ迷ってる妻の箸　逸名
迷い無しこの身このまま仏なり　バット
決断をしてから本気で迷いだし　静泉
気の迷い新興宗教につけ込まれ　保夫
斉場の煙に迷い嗤われる　本蔭棒

佳

迷い事人にも言えず引くみくじ　不酔
迷うてる膝へこどもが腰をかけ　素身郎
迷い子に血液型も書いてある　宵明
観音の慈眼に迷い裁かれる　白水

人

満ち足りて夫婦は明日へ迷わない　梁水

地

食欲と物価に迷う台所　恵子

天

夢にまで五線譜描いて歌手迷い　春日

軸

停年の近づき二度目の職迷う

本家

大山と金選

あとつぎが出来た本家の鯉のぼり　暁明
古文書を本家の蔵で見付け出し　国彦
御本家に生れやむなく村で老い　十止庵
墓だけを残して本家も街に住み　洋々
洋風に本家も時流に逆らわず　軒太楼
嫁が出て本家の隣りへ分家させ　鎮也
御本家の嫁Gパンでお茶を出し　カズエ
弟に本家継がせて恋に生き　春日
宗派にも本家争う波が立ち　本蔭棒

敏

神様も本家争いあるらしく　梁水
柔道の本家慌てている五輪　佳女
出戻りは本家の空気に落ちつけず　貞男
本家とてお金のことは別な顔　輝親
粟おこし本家のを買う浪華っ子　三十四
本家こちら元祖こちらと軒並べ　昌道
看板を本家元祖にして競い　伶人
本家から廻り始める寄付名簿　不二
寄付帳へ本家苦しい筆をとり　七面山
寄付帳も本家の次に名前書き　代仕男
本家まだ三顧の礼で迎えられ　保夫
手土産も先ず本家にと持たされる　葵水
床柱背にした若いのが本家　弘朗
本家には本家としてのある面子　七面山
本家筋の意見を親類重要視　木魚
本家だというて頭が高すぎる　重人
結局は本家の意見聞きにくる　英詩
仲人を本家の顔で引受ける　恵子
日旺をつぶして本家のお手伝　旭童
本家の子泣かして今日も叱られる　素身郎
手伝いに来いとは本家もういわず　悠泉
選挙戦本家と争うはめになり　肖二
お先祖の土地に本家は養なわれ　暁風
屋敷ばかり広く本家が荒れ果てる　カズエ
落ちぶれた本家格式だけは持ち　どんたく
お正月だけは御本家らしくなり　苦句
一刀彫本家一代弟子持たず　魚山
正月の餅は本家で搗いてくる　利美
出戻りの姉が采配ふる本家　三十四
御本家は代々養子の女系　笑風
親の代消えて本家と疎くなり　章雅
相続法本家分家の格差なし

軸

本家の本家またその本家とか他人

川柳塔柳箋　一冊　七〇円　送料　七〇円

初歩教室

――題「歩」――

本田恵二朗

宇品まで歩武堂々がそれつきり　静観堂

静観堂翁が若かりし頃を思い起しての詠嘆である。その頃の翁は、軍医大佐殿として、軍人の労苦や楽しさを共に体験されていた。野戦場へ向う輸送船は宇品から出航していたが、勇しい姿で征った多くの兵士達は、それっきり生きて帰えらぬ人となってしまった。その思い出は翁にとっては、針で刺され痛みであろう。そこで生れた一句がある。

敗戦の責めこのへんでご勘弁

なんとも素直に素朴にあやまっておられる。ところが、年賀状に託して、二十一才の女子大生から、次の如き一句を返えされて来た。

敗戦じゃない戦争の責め一生涯

そこで、お面一本とられた顔になったのは、静観堂翁その人である。

静観堂一本とられて苦笑する。

これは毒舌家恵二朗が進呈した駄句であるがもうこのへんで敗戦の責めなど互に忘れ去った方が、すがすがしいと思う私である。

牛に劣る歩みへネジを巻き直し　一二三

この作家は初歩ではないばかりか、私のにくたらしきライバルの一人であるが、四十八年の年頭に当り、初心に返って、心新しく川柳への情熱を燃そうと、いみじく且つしおらしく決意して当教室に参加したと言う。その謙虚な心根こそ川柳人は忘れてならないことである。そこで、あたかも挑戦状をつきつけられたように思った私は、逃げるわけには参らぬ。受けて立つ構えで私は彼と対決するであろうが、思えば楽しき戦でもある。

薬は不要歩けと診断書　翁童

（薬より歩け歩けと言うカルテ）

ヘボ将棋王将様が歩にやられ　三十四

（歩ごときに寝首かかれたヘボ王将）

人波の逆さを歩くプラガード　誓二

歩け歩けとすげない私鉄スト　同

（歩け歩けと私鉄ストめに言われ）

（足があるなら歩けと私鉄ストめ）

ゆったりとした歩みに自信みなぎらせ　静泉

（ゆっくりと歩く姿に自信見せ）

（自信満々土俵へ運ぶ歩がたしか）

孫と往く歩巾縮めて腰曲げて　杜月

（孫の手へ歩巾縮めて腰曲げて）

勝算があってか先手五五歩　同

（先手五五歩さては勝算があるらしい）

歩くのが薬にされて妻の伴　慶彦

（歩くのは薬なのよに引きづられ）

口ずさむ軍歌に歩調とる夜道　同

（口ずさむ軍歌に夜道の歩が軽い）

目標の歩合狂って倒産し　つとむ

（目標の歩合が狂ってから落ち目）

私鉄ストが歩く本能目覚めさす　度

（歩く本能思い出させた私鉄スト）

議会制の葬送曲か牛歩戦　同

病窓の青空歩く夢に酔い　同

歩くのを苦にせぬ妻で田舎者　利美

（歩くのを苦にせぬ妻で世話好きで）

ひとりでは歩けぬ奴がするゴルフ　同

（独り歩きできぬくせにゴルフ靴）

永く病み歩けることの嬉しさよ　貞祐

（試歩の下駄土と対話をしてあきず）

（長病みが足を見つけた日の凱歌）

手さぐりが歩かせたこの道二十年　頼次

（手さぐりで歩き続けた二十年）

歩いても歩いてもオアシスのない砂漠　同

（オアシスを探し続ける歩が重い）

歩道橋お向いさんの本通り　志津

（歩道橋お向いさんへやれしんど）

歩調合せ二人で進んだ長い道　つね

（手を継ぎ歩き続けた長い道）

麻痺の子の手を引く一歩母必死　同

（麻痺の子の一歩一歩へ母必死）

札所巡り歩いて詣る有難さ　ますゑ

（有難や札所巡りの歩が軽い）

我を捨て仲良く暮す歩みより　生仏

（我を捨ててみたらだんだん歩み寄り）

叩かれて牛は二三歩急ぎ足　隼人

軽味の句としてなかなか良く出来たよ　同

急かずに歩こう牛の年なれば

（丑年だ牛の歩巾を見習おう）

歩道橋見上げてソット脇へそれ　濁水
（歩道橋見上げ脇道ないかいな）
路上では歩行者優先嘘ばかり　同
（歩行者優先などと大きな嘘をつく）
歩きぞめ若い夫婦は手をたたき　繁子
（パパママの手拍子に乗る歩き初め）
新任の課長にも歩調すぐ合せ　保夫
（新課長の歩調に如才なく合せ）
小走りに歩ける老父に安堵する　同
（小走りに歩く老父です達者です）
背のびして歩調合した苦の世界　静子
（背のびして歩調合せた頃偲び）
歩を数え所在なき身は堤行く　賛平
（土手八丁所在なき身の歩を数え）
歩道でも車道にされてあの世行き　陽山
（歩道を車道にされた日の不幸）
歩の悪い話そっと脱けてくる　健児
（歩の悪い話へそっと席をぬけ）

試歩の杖励ますみどりの風が抜け　洋々
（試歩の杖みどりの風に励まされ）
道づれになった歩巾で愚痴も聞く　同
（道づれの歩巾に愚痴を聞かされる）
病後の身生きるに一ばい試歩の庭　藤持
（試歩の庭生きろ生きろと言うてくれ）
あゆみ初め手のなる方へ一歩二歩　つた子
万歩計見舞に貰う恢復期　同
山登り一歩一歩とふみしめて　秀村
（六十路坂一歩一歩と踏みしめる）
子亀たち母待つ海へ一歩一歩　敏
（子亀たち母待つ海へ歩を速め）
うぶな恋手にさえ触れず歩くだけ　比呂路
（ただ歩くだけで満ち足るうぶな恋）
自信もつ男の歩巾リズミカル　好一
小走りで歩巾を合す暮の街　同
右左どっちについても歩に過ぎず　弘生
遊歩道お地蔵さまに見送られ　カズエ

（お地蔵さんとなじみになった散歩道）
歩行許可主治医の声も晴れている　同
恍惚に追いつかれまい万歩計　同
今日一日母の歩巾で奈良の春　露杖
（老母の歩に合す奈良路へ春日笑む）
牛歩です初歩教室の生徒です　同
謙虚な作家は進歩する。自惚れは退歩する。
苦労人一歩さがってものを言う　本蔭棒
パンタロン男をリードする歩巾　同
未踏の地一歩一歩が挑戦す　重人
セールスの靴は歩合に堵けている　同
蟹だって自分の道を歩いてる　寿美子
動く歩道ある日なんだか馬鹿らしく　同
掛合いの歩のない方が数で来る　同
この調子だ、精進あれ。

題―（味）―三月二十日締切（五月号発表）
宛先　〒711　岡山県倉敷市下津井三五二
本田恵二朗

『奥能登』

河内天笑

註文の途切れたとこで旅に出る
去年ある句会でこんな句を作って、註文の途切れるのを心待ちにしていたら一月の二十日過ぎから四、五日の間絵にかいたようなチャンスが巡って来た。
漁港から漁港へつづく能登の路
青首をもうすぐ埋める雪となる
春ともなれば雪のだんごの浮く小川
曲っても曲っても一本道である
荒海に雪やこんこん呑まれゆく
突然に山をかき消す能登の雪
突然に雪は能登路を襲うもの
灯台はいまに飛び込む姿なり
ここの民話も大きなホラが面白し
横雪が樅にかわると駅に着く
雪の闇この汽車だけがひた走る
朝市へ急ぐ車輪は雪を噛み
朝市へ鳥は低く低く舞い
奥能登の冬のたんぼや鷺の園
千枚田一枚ずつを登らんか
千枚田稲の団地は冬ごもり
どん欲な鳥が一羽舞い止まず
目のとどくとこみな荒れる能登の海

曾々木海岸

難破船の魂ふわり波の花
地酒酌む土地の訛りは語尾を上げ
桁ひとつ間違いそうな輪島塗り
首の骨ならして観光バスの窓
絶景をひとつ見逃す句が浮び
汽車のトイレは今鉄橋を渡る音

軍艦島

松の木のかつらをつけた島浮ぶ

第二百六十回（四十八年度第二回）

大萬川柳

「決断」

入選発表

選者　川村好郎

投句総数　七百四十五句

入選　七十一句

禁煙の決断せまる聴診器　堺　真沙子

決断をしたのに雑音まだ聞こえ　松原　重人

決断がついて男の高鼾　大阪　小松園

実印を握って決断まだ迷い　大阪　智子

決断の男の眉に明日がある　大阪　君子

入籍を決断させた岩田帯　大阪　あいき

他目から見た決断のもどかしさ　大阪　好一

決断を迫って女瞳を閉じる　大阪　文秋

決断へ男の拳焦ってる　東大阪　弥生

決断は法何条で役所済み　堺　一舟

飽き性と知らず決断したを褒め　大阪　儀一

野党の声無視して決断する予算　八尾　鶴声

決断へ私情がゆさぶりかけてくる　大阪　修史

最悪の決断をした慎重さ　松原　史好

決断の女こだまへ振向かず　大阪　美幸

決断をさせる汐時見る女　堺　天笑

母一人嫁く決断に踏み切れず　富田林　維久子

脱サラを夢見決断まだつかず　香川　酔夢

決断をしろとソロバンにせまられる　倉敷　翁童

決断の禁酒へ妻のうす笑い　大阪　一栄

死ぬる目に逢って決断やっとつき　倉敷　筒子

決断の日から未練がつきまとい　岡山　敬一

決断をせまる女の眼がこわい　大阪　柳信

決断の無さを嗤っている株価　大阪　形水

最良の決断でした共白髪　下関　木石

決断を阻む小さな義理があり　門真　鉄児

茶柱で決断やっとつく女　大阪　比呂路

大臣の決断ゆさぶる薙旗　堺　宏子

寝不足の顔決断がまだつかず　平田　代仕男

決断は速いが中止もまた早い　大阪　濁水

決断をにぶらす過去の甘い夢　守口　瓢太

決断はつかずソファーのきしむ音　那山　カヅエ

決断が出てから幹事もめはじめ　橋本　木魚

脱サラの決断つかぬまま停年　松江　鶴丸

決断を促すように青い空　岡山　七面山

首相の決断物価を又上げる　東大阪　清人

決断の二人にひびく発車ベル　岡山　神戸牧人

決断のあとは天運信じてる　神戸　牧人

恩義重たくて決断が鈍り　岡山　川端柳子

一すじの涙が決断迷わせる　藤井寺　吸江

決断がついて食欲ひさしぶり　富田林　弥栄子

決断がついたか猫を放り出し　堺　青香

決断へ男の方がしぶりだし　倉敷　白水

足洗う決断紐に巻きつかれ　堺　一二三

恋の傷仕事の鬼になる決断　倉敷　里風

金にもの云わせ決断無理にさせ　大阪　水客

決断がくずれ又逢う眉を引く　守口　笑風

決断へ預金通帳ゼロにする

捨て石となる決断へ夜が明ける

決断の胸に私心を閉じこめる

決断の男心に冬がない

決断を星空だけに語りかけ

目覚めれば昨夜の決断またにぶり、

既に肚決めて雑音聞く社長

決断のにぶさを笑う波がしら

決断は握り拳の中になし

決断を明日に延ばしているゴルフ

決断を迫る男の曲り角

決断の自首へ法の温み知る

決断がまさかと思う人に変え

決断は妻の優しい瞳できまり　倉敷　克枝
決断へ妻の割烹着が白い
決断へ子の将来が突き当り
佳　句　東大阪　弥生
愛情でたべていけない日の決断　大阪　一栄
わがことになれば決断にぶくなり　兵庫　可住
決断は男の肚に蔵うもの　大阪　柳志
はっきりしなさいと仲人から電話　松原　史好
決断へ内助うるさいこともあり
決断を下す孤独な椅子にいる
人ノ句　松原　重人
決断の歩巾となった曲り角
地ノ句　倉敷　梁水
決断へ過去の徒労が生きてくる
天ノ句　大阪　小路
離したくない娘へ決断までの日々　選者　吟
決断を逆う明日を考えず

昭和四十八年度ベストテン（一月現在）

一、**史好**　六、〇　松原
二、**太茂津**　五、五　和歌山
三、**花梢**　四、五　富田林
四、**白水**　四、〇　倉敷
五、**重人**　四、〇　松原
六、**克枝**　四、〇　倉敷
七、**弥栄子**　四、〇　富田林
八、**梁水**　四、〇　倉敷
九、**清人**　四、〇　東大阪
一〇、**小路**　四、〇　大阪
一一　柳志　三、五　大阪
一二　一栄　三、五　大阪
一三　弥生　三、五　東大阪
一四　里風　三、〇　倉敷
一五　一二三　三、〇　堺
一六　笑風　三、〇　守口
一七　水客　三、〇　大阪
一八　吸江　三、〇　藤井寺
一九　筒子　三、〇　倉敷
二〇　青香　三、〇　堺
二一　文秋　三、〇　大阪
二二　好一　三、〇　大阪
二三　あいき　三、〇　大阪
二四　阿茶　三、〇　大阪
二五　本蔭棒　三、〇　奈良
二六　文助　三、〇　呉
以下略

昭和四十八年度第四回
「半日」　五句以内
締切　三月二十日
第五回「ひがみ」五句以内
締切　四月二十日
投句先　〒593　堺市堀上緑町一の三の七　藤井一二三方
大萬川柳係

一分間の柳論

西田　柳宏子

「こんなの川柳でしょうか」、「これは何を言っているのですか？」、「こんなのが川柳なら私は川柳を止めます」

こうしたやりとりを私はときどきうける。独りよがりと言っては失礼かも知れないが、創りよがり的句が目立っていることも事実である。創作芸術である以上作句者の意図、主張は勿論自由であり、独りよがり的鼻柱の強さも必要だが、その作品が活字になり、発表されることには考慮がほしいと思う。

更に選者と作句者の見解が喰い違っている場合など猶更救い難いものを感じる。発表する以上自分の主張、句意を正しく伝えることが作句の妙味ではなかろうか、自句の作意が相手に正しく理解されないことで、相手を蔑視する思い上りはまさに川柳発展を阻害すること甚しいものと云えよう。

古来の名句、秀句が素直な表現で、然もひしひしと現代の私達にも生きていることを見習いたいものである。

四月新学期会員募集
短期速成
費用低廉　三大モット
内容充実
（規則書呈上）
大阪市南区大宝寺仲之町一丁目
誓得寺内　関西奇術教室
電話大阪〇六(271)七一二八

柳界展望

（原稿締切毎月末）

有信 新之助

▼時の川柳社第六回東洋樹賞は「川柳文学」の堀口塊人氏に決定。贈呈式を兼ねた川柳大会は四月八日。

▼わかくさ300号達成記念会、四月十五日十二時半ワールドホテル、東成区大今里町西三の九（地下鉄今里駅下車 西出口 南へ百米。費二千円。懇親宴を含む。宿題二句、味。マナー。春、夫。シグナル。成長。流れ。友。締切二時。申込三月末日まで〒544大阪市生野区鶴橋五の八の十一番傘わかくさ川柳会宛。

▼川柳なごや十二月号で東野大八氏が、徹底した下士官的実用性に富んだリアリズムの感覚、実戦的要領のよさを持った角さんにイヤ味一言、太閤も燃える大阪城は見ず。

▼下村梵氏（新津市）の個人誌「武玉川」第十一集が出た。相変らず執筆陣は豪華。荻原井泉水、玉川一郎阿達義雄、堀口塊人、東野大八、中子稲子諸氏。申込所〒956新津市本町四丁目一四の一〇川柳文芸学会（季刊年四回発行、送料共一カ年六百円）

▼福島真澄集（私版・短詩型文学全書）が東京都文京区本駒三—一四—一〇八幡船社から発行。送料共二百円。——うたた寝や乳やる仲の水時計ほか。解題は片柳哲郎氏。

大阪には克枝ファンが多い。そこで左から一三夫、鬼遊、葉子、克枝、薫風の皆さんが囲む。（岳人撮影）

▼川柳なごや四百号記念川柳大会（昨年十月二十九日）で、一位伊藤隆士氏（三重）二位浅井静允氏（愛知）三位金子呑風氏（上田）らが獲得され盛会。

▼せんりゅう「灰皿」は三井酔夢さんが関係しておられるが七号で新しい年を迎えた。広々としたスペースで自由奔放に謳って和やかである。健闘が期待される。

▼邑久町の岡山県川柳大会（一月二十一日）で十位水粉千翁氏（倉敷）十二位荒山芳昭氏（吉永）十三位山田止水氏（岡山）らが入った。

▼一月二十日朝日夕刊紙上で、小寺正三氏が俳誌「運河」（奈良市）上田千代子氏の受賞作「木枯しの仲間はずれが吾につく」「蛇使い生れながらの蝮指」他二句を、かなり個性的だが、一歩あやまると川柳になりそうな作品、と評しておられるが、かりに川柳として評価した場合、どの柳社に持っていっても受賞に価する水準の作品とはいえないのではないか。

▼第十八回全国川柳作家年鑑（ふあうすと川柳社）は姓雅号、年令、職業、郵便番号、府県名、住所、作品十句。参加費八百円（参加用紙と同送）締切四月末日。投稿先〒631奈良市西大寺国見町一—一—四一一、伊藤勢火宛。なお、ふあうすとは二月号を五百号記念号とされた。

▼柳宴岐阜川柳社四十七年度最優秀作家決る。菊花石賞（同人）田中一守、堀久美子両氏。柳宴賞（会員）高木翠香、棚橋光子両氏。——青木三碧氏が川柳を披講するときの調子やリズムの面からも、十七音字の定形を守るべきであり、披講する側もそれを研究して、句の雰囲気を十分出すよう提唱している。

▼小樽在住川柳家句集（川柳教室編）が小樽市松ケ枝二丁目七番六号、小樽川柳教室から発行。三百円。序文直江武骨。

▼市岡暁舟氏（ハワイ）は誌友獲得にご尽力願っているが現在三十名になっている。

各誌受賞作品

▼川柳人—垂天賞受賞作品

◇どの首を替えても同じ人形師（福岡）青木 浮岳

◇自衛隊の重みに耐えている九条（北九州）友田中間子

◇空っぽの骨箱へ勲八等届き（堺）松原竹美

▼噴煙吟社第一回濤明賞

—紙上作品より—

◇正義感或る日打たれる釘となる（福岡）下川紋十郎

◇女房のアクビを貰い寝るとする（名古屋）池本千舟

◇われも老い君も老いたり燗ざまし（熊本）西田放亭

—応募作品より—

◇天守閣かげろうにしてどんど焼き

◇嘘はもうつかなくなってデスマスク（熊本）松本国雄

◇みな善人だから歯車くいちがい

◇欲望が育つマンションできあがり（熊本）山口麦彦

◇疵ついた一日ながら合掌す

◇鶴は檻に愛を疑う貌をせず（大阪）定金冬二。

▼いずも川柳会賞

◇再会のひとりいくさの影と来る（米子）八木千代

▼柳都47年度柳都賞

◇つづら折る坂に寄りそう

▼月原宵明氏（今治市）から「勤めている社長の二男が愛媛県今治地区の議員補選に出馬、私が事務長となりどうにか当選、そのため川柳は一カ月休みました」と。

▼長谷川三司氏（尼崎市元同人）は昨年九月六日逝去。

▼わかやま吟社の運営は垂井葵水氏の自費でまかなわれているが、それを見かねた太茂津氏が援助を求めておられる。基金一口五百円何口でも可。

▽**同人の動向**△

▲西尾栞氏（副主幹）は五月十三日の尼縁之助氏句碑除序幕式に協力するため、本社松江観光旅行の団長として活躍。別掲のとおり定員三十名で締切るのでお申込みは早目に。

▼梅谿庵不酔氏（姫路市）に一月十二日二人目のお孫さん誕生。実に十三年ぶりで二人目のお孫さんを得られたとか。――泣き顔も寝顔も可愛い　孫の顔　――不酔。

▼古川鶴声氏（八尾市）もお孫さんが元日に女児分娩、ヒ爺になりましたと。――ひ孫見てひ孫の成長へ生きる欲――鶴声。

▼本田恵二朗氏（倉敷市）が「倉敷春秋」新春号に川柳随想を書いている。「老妻の手綱は神通力である」から、夫妻の近況、孫のこと、八十九才の母堂のこと、少年時代の追憶などをそれぞれ句を通して語っている。

▼菊沢小松園氏（大阪市）夫妻は、長男夫妻と、伊豆箱根――三浦半島――東京へと、時間にしばられない旅行で正月を過された。――湯煙りの妻に女が蘇えり

▼岡村久志良氏（岡山県）は一月二十一日に開催された岡山県川柳大会に出席された薫風氏に一三夫氏と葉子さんに、夢二の色紙（印刷）やノリなどをことずけられた。ありがとうございました。

▼松川杜的氏（京都市）は北陸路から―あつらえ向きの雪になり―杜的。

▼奥谷弘朗氏（倉吉市）は一月二十八日、新築なった自宅を開放して新年句会を催され、打吹川柳再建の一歩を踏みだされた。

▼清水一保氏（鳥取）は公害防止対策の役職に就かれて活躍。――公害の下界見降す雪の峯

▼山田季賛氏（広島市）は一月十二日―十六日を南九州観光旅行。――さつま路の味覚の味がわすられず

▼岡崎祥月氏（松江市）は川柳の功績を讃えられ松江番傘川柳会長から金一封を受けられた。

▼若柳潮花氏（高槻市）から「紫香氏の娘さんが三月に結婚の由、私の方は愚妻が新春早々出先きで倒れテンヤワンヤでした」と。

▼西田柳宏子氏（大阪市）の関係されている「テラサキ」の創業五十周年記念日を迎えるにあたり従業員から、その標語を募集、標語の入選賞金が八万五千円という大物であり、この選者には関西標語作家連盟の不二田一三夫氏が依嘱されている。

▼三井酔夢さん（香川県）は大萬川柳の選者として招待され、その翌日生駒の葭乃先生を薫風氏の案内で訪問、意義ある柳談に時を過ごされた。

▼不二田一三夫氏は新関西新聞へ読切小説〝夜の狂宴〟を執筆、そのほか目下ポルノ物で若返り法をとっておられる。なお氏のもう一つの顔、標語作家として鈴木二郎著「浪花巷談（おおさかこのごろ）」に標語入島の民（他四篇）名古一水。（同人賞）

◇義眼の視野なら背中までまわる（他四篇）菅原孝之助。（会員賞）

選のコツなどが収録されている。〒530大阪市北区樋上町四五、創元社（定価四八〇円）

▼**三月の句会**

▼**堺・若芽合同句会**は十三日午後六時―題は一本気・走る・煙。会場は摩天郎居（農協出題「地図」）

▼**南海川柳会**は十五日午後六時―題は機関車・予想外・一匹狼。会場は南海電車本社食堂内。

▼**南大阪川柳会**は二十日午後六時―題は健康・演技・華やぐ・雑巾。会場は松崎町二丁目以和貴荘。

▼**川柳東大阪句会**は二十四日午後六時―題は銀・幕・巻く・コンビ。会場は東大阪中央公民館第二集会室（会費百五十円、投句百円）

新同人紹介

大路美幸（おーじ みゆき）

―栞・小松園・鬼遊推薦

（第23集）
「吉備団子」
定価　五〇〇円
送料　二〇円
発行所＝岡山市津島二五四一　川柳岡山社

本社二月句会

会場　以和貴荘
七日　午後六時

二月というのにオーバーのいらない日もあって、たしかに異変である。その異変が句会にもあらわれて、さびれるはずの二月句会がナント八十名に近い盛会になった。こんな異変なら毎月来てほしいものである。

多久志氏の柳話は、先月のNHKテレビの「こんにちわ奥さん」に川柳を出す時間のなかったことを説明され、テーマは「左きき」の体験談から、医学的に伝説的に興味いっぱいの左ききあれこれで満場を魅了された。そしてムリに左ききを矯正せぬ署名運動が場内に展開した。まことに柳話にふさわしい川柳的な「左きき」にメモをとっている人も見受けられた。

そして、氏は、なるべく両手を使うようにと拍手の中を降壇された。

二月句会の月間賞杯は常連城一舟氏にかがやいた。

（河井庸佑整理）

出席—与呂志・浩輔・古方・新之助・野迷路・花梢・潔・一三夫・滋雀・百酒・葛城・一舟・たかし・竹荘・ふじ子・文秋・肖二・綾女・太茂津・作二郎・喜風・柳志・美幸・維久子・静馬・多久志・水客・瓢太・柳宏子・摩天郎・春巳・三十四・弥生・悦郎・誓二・葵水・千寿子・緑水・敏・金三・好郎・吸江・千万子・素郎・俊夫・祐司・真紀・生々庵・鶴声・勝晴・いさむ・牧人・庸佑・形水・一扇・儀一・百合・薫風・岳人・清人・雀踊子・小松園・好一・夢成・栞・鬼遊・恒明・あいき・智子・静香・君子・静歩・天笑・重人・幸太郎・一二三・凡九郎・葉子。

席題「Gパン」　高杉　鬼遊選

Gパンを　息子の留守に　はいてみる　一扇
Gパンも　悲鳴をあげて　いるヒップ　緑水
Gパンに　文句をつけて　惚れている　悦郎
Gパンで　大和　撫子　かっ　歩する　一三夫
Gパン　がずり　落ち　そうな細い腰　葛城
自画像へ　Gパンの　脚くみ　直す　水客
草月流のオブジェにGパン似合いそう　静馬
恋は　まだせず　Gパンで　のし　歩き　柳志
Gパンの一ばん　疲れてるのが　ボス　滋雀
Gパン　も　女　女として　にあい　摩天郎
Gパンの　汚れ　働く　自負　を　持つ　牧人
Gパンの　三十年後を　ふと　思い　美幸
Gパンで来た　娘が　華を生けて去に　一舟
追越して　Gパン　の　胸　確かめる　潔
Gパンの　足が　つかれて　来た　西陽　雀踊子
Gパン　が　四五人　青春の　悪　企み　清人
古ければ　古いで　Gパンよろこばれ　緑水
Gパンを　はいた　男に　負けて　いず　竹荘
Gパンに　リュック　気ままな時刻表　いさむ
Gパンの　娘にも　鏡を　拭く　心　美幸
姿ほど　役には　たたぬ　娘の　Gパン　俊夫
Gパンで　文化に　触れた　顔に　なり　小松園
長女　二女　三女　Gパン　駈けてくる　作二郎
島は　夕焼み　かん　畠の　Gパンよ　夢成
Gパンの　娘に　負けている　坐禅　薫風
Gパンが　妙な　色気を　撒いて　過ぎ　天笑
Gパンで　男を　敷いている　も　恋　素郎
Gパンの　明日へ　虹を　裂いて　いる　静歩
Gパン族　質実　剛堅　とは　見えず　百酒
Gパンの　失意は　雪を　見て　たっけ　素郎
Gパンのチャック　半分　噛みそこね　葛城
Gパンで　職人　さんも　若が　えり　花梢
Gパンに　合わない　尻は　母　ゆずり　新之助
Gパンの　夢は　やっぱり　女の子　葵水
Gパンに　娘　忘れた　靴の　音　喜風
Gパンの似合うおんなのハーモニカ　夢成
Gパンをはき　ババ抜きの顔になり　俊夫
GパンとGパンニヒルな　会話する　静歩
美学　専攻　Gパン　は　継だらけ　古方
Gパンの　瞳　ピストル　乱射　する　静歩
Gパンを　女殺しへ　護符とする　鬼遊

席題「顔負け」　垂井　葵水選

顔負けの　資料　つぎこむ　のも　大人　君子
あんたには顔負けですとてれて居る　ふじ子
口止料　何んぼ　貰ろうた　まで　喋り　静馬
お膳料まで　取って坊主　のんで去に　柳志
猿回し　キッスを　させる　紐も　引き　滋雀
顔負けをしたのか犬までそっぽ向き　雀踊子
性教育　顔まけが　して　座を　はずす　千万子

お下髪 突然 婦人科の 話しを する　夢 成
顔負けと言うてなかなかあつかましふじ子
顔負けをするほど 小石けとばされ 水 客
大人 顔負け する本を 読んでいる 千鶴子
持てたはずホステスこんなに喰べよった 静 馬
チンピラ の 反抗へ口 開いたまま 美 幸
政治家の 嘘に 顔負け しておれず 牧 人
税務署 も 顔負けを した 申告書 多久志
ママごとのママとパパとのラブシーン あいき
男性 顔負け 三杯目の 大ジョッキ 生々庵
顔負けをしたと 勝負は ついていた 文 秋
ご試食へ お替りを 出す 奴も おり 瓢 太
顔負けをしてたら 古いひとにされ 一 舟
タレントの どぎつい 河内弁に負け 柳宏子
年賀状の 二伸で 金の 無 心 され 柳 志
どうにも 止らない 孫の 身 振り唄 三十四
顔負けの 顔が ひきつる 負け 嫌い 祐 司
顔負けをするほどのろけて 去にはった 恒 明
淑女さりげなく SEXの 話しする 夢 成
弁舌 で 店の 客まで 呑んで 去に 新之助
真似られて からは 驚うたわない 素 郎
現代ッ娘 明治の 口をあけた 儘 鶴 声
女客 撰って 値切って 戻しに 来 好 郎
長幼の 序 どころ ではない 行儀 瓢 太
顔負けをしたと 母親 先に 折れ いさむ
口答えするのに 乳豆 離 さない 一 舟
セールスを 顔負け させた 妻の 嘘 清 人
顔負けというのがたっぷり 酔うている 静 歩
司会者も 顔負け 花嫁 歌い 出す 形 水
息子らが 顔負け 老らくの 恋 進む 葵 水

席題「筆不精」　墨 作二郎選

筆不精 娘の年頃をたのむ 筆 千万子
面影を 抱いて 返事は まだ 出さず 小松園
筆不精 なんとかやっている 証拠 恒 明
筆不精 候文で 書きたがり 多久志
筆不精が 帰ってくる 盆がくる 新之助
忘れた 頃に 礼状を 書く 筆不精 誓 二
地球儀を 回す 女へ 筆不精 岳 人
筆不精 一生 悔を 抱き 続け 智 子
娘の 方が 気を 病んでる 筆不精 静 香
筆不精 いつも 妻子 の 筆で 来る 緑 水
筆不精 たまの たよりは 二度の 縁 摩天郎
筆不精 とうとう 葉書 買いに やり 滋 雀
筆不精の 筆が 大きく 見える 朝 夢 成
遺言 状 ついに 筆不精 書かず 素 郎
筆不精 拝 啓 前 略 から 乱れ 生々庵
筆不精 母には 詫びる こと ばかり 智 子
何年経っても 変わらぬ 景色 筆不精 葵 水
筆不精 の 男で 風船 蹴っている 夢 成
恋の 終わりが 筆不精 にする 水 客
こころ 燃え つきず 筆不精を 自嘲 葵 水
筆不精 雪 しんしんと 降り 積る 清 人
筆不精が 今日 青々と ひげを そる 夢 成
筆不精の 筆 カタ カタと 笑いだす 祚二郎

兼題「八方美人」　菊田いさむ選

八方 美人 も 敵七人 を 心得 る 一 栄
眉 に 唾 八 方 美 人 の 口 車 八 郎
八方 美人 こころの 友が み当らず 滋 雀
八方 美人 自分の 影を 見 失 ない 花 梢
八方 美人 孤 独 に 戻 る 鏡 掛 葵 水
八方 美人 おのれの 体 臭 見 失い 生々庵
落選は 八方 美人を 無口にし 祐 司
八方 美人 その 裏側が 崩れかけ 鬼 遊
仲人を 八 方 美人に 頼 み 込 み 肖 二
散票へ 八方 美人が 指 揮 をとり 静 歩
八方 美人 帰りの 遅い 日が 続き 金 三
番犬に まで 八方 美人のご 用聞き 儀 一
八方 美人 ある 日 離婚を 考 える 作二郎
金の 奴隷で 八方 美人の 面かぶる 牧 人
世 話 役は 八方 美人で よく 動き 美 幸
八方美人ひとり ぽっちの 旗をふり 雀踊子
姿見へ 八方 美 人 距 離 を 置 き 岳 人
八方 美人 税務署 だけは 苦手なり 静 馬
八方美人 二つカチ 合うプロポーズ 一三夫
権力を 摑み 八方 美人の 仮面 脱ぎ 太茂津
八方美人あっちこっちで 言いそびれ 与呂志
反論を 八方 美人 は 笑みで 受 け 美 幸
社長 秘書 八方 美人 という 自信 維久子
八方 美人 財布の 紐も ゆるみがち 君 子
八方美人の 罠にかかった お人よし 天 笑
八方美人 今日は 司会のバラを着け 葛 城
八方美人の笑顔へ 程よき距離をおく 小松園
八方美人 あんたどっちの 味方なの 摩天郎
八方美人 話題の 途中で もう 握手 弥 生
八方美人 スパイや ないかなと思い 恒 明
八方美人酌ぐだけついたらもう居らず 竹 荘
はいはいと 八方 美人 義理を 欠き 喜 風
八方美人 家内の 愚痴は 聞き 流す 肖 二
八方美人の 母で 縁談 すぐ 決まり 一二三
誰にでも 握手 したがる 胸の バラ 素 郎
八方美人すぎてプロポーズが来ない 水 客
八方美人ひとり 飲むのが趣味という 俊 夫

テレビ 料理 八方 美人の 味をつけ　酔々
八方 美人 とき どき 妻に 疑われ　いさむ

兼題「尾行」　橘高 薫風選

尾行する 都 大路の 人 通り　浩 輔
ラーメンを食べさしにして尾行立ち　文 秋
尾けられて いる とも 知らず 戎橋　勝 晴
目が合った尾行が 借りる 煙草の火　酔 々
尾 行 して 女 表 札 見 届 ける　形 水
尾行する 方が あやしと 犬が 吠え　一 舟
尾けられて居るのを知ってする欠伸　弥 生
尾行されて居るとも知らずよくふざけ　ふじ子
少年の 尾行は 怪我 の 功 となり　祐 司
まいた気で いたら 尾行が変ってた　文 秋
土地感が あって尾行を やり過ごし　小松園
尾行されてるような気になってくる尾行　古 方
尾行 しながら 牽制 球を 考える　生々庵
うっかりと 尾行が 前になっていた　静 馬
尾行が見つけた羽織の襟が折れてない　生々庵
オリオンの きれいな 夜を尾行され　天 笑
尾行して 見たが 結局 パチンコ 屋　野迷路
犬曲る 道 そのままに ゆく 尾 行　千万子
尾行 する 方も カレーを 注 文す　天 笑
疲れた 男は 疲れた 男 尾行する　作二郎
頭の 方から 疲れてきた 尾 行　新之助
一 本 道で 尾 行 まかれて 来　柳宏子
尾行されて いると 知ってる面白さ　栞
エレベーターへ尾行呆けた顔で乗り　牧 人
尾行した 酒場で 先に 酔って いる　どんたく
目と鼻の 距離で 尾行はひきかえす　花 梢
尾行者 の 時計も 一秒 ずつすすむ　夢 成
デカと言うさだめに耐えている尾行　柳 志
尾行されているから花を買いに行く　作二郎
尾行ふと よりのもどらぬ 愛と知る　素 郎
麦笛 吹いてる 虚々 実々 の 尾 行　薫 風

兼題「ボイコット」　大坂 形水選

ボイコットここまで来ればしかたなし　季 賛
ボイコット した 学長 の 卒 業 証　晩 歩
忍 従 の 限 界 超えて ボイコット　八 郎
ボイコットしてもしても メイドインジャパン　どんたく
威勢よく お杓子を振る ボイコット　幸太郎
ボイコット させてる方も うるさ型　好 郎
子どもみな女房の肩持つボイコット　静 馬
ボイコットの署名してすぐ買いに行き　吸 江
ボイコットすんだら誰かが儲けてた　弘 生
ボイコット 出来ず 唇 噛む 市場籠　一二三
ボイコット する 学園に 籍を 置き　鬼 遊
天下りの 椅子が 冷たいボイコット　牧 人
血の雨が降りそうであるボイコット　恒 明
ボイコットする 気原価を 調べあげ　浩 輔
不言実行かけひきが下手のボイコット　生々庵
ボイコットしても 物価は 下らない　敏
不買同盟 みな金持ちの 主婦ばかり　一三夫
ボイコットされても稼いでるポルノ　好 一
返品に 他社のもまじる ボイコット　素 郎
ボイコットに ボスも 一役糸を曳き　摩天郎
日 本 人 反省 せよと ボイ コット　文 秋
ボイコットされてもアニマルの笑み止まず　水 客
交渉の 余地を 残して ボイ コット　三十四
主婦連の 切り札と いうボイコット　天 笑
ボイコットする 日だ 手を握り合い　俊 夫

尼緑之助句碑除幕式と記念祝賀川柳大会

とき　昭和四十八年五月十三日（日）
除幕式　十時三十分から
記念川柳大会　十二時三十分から

ところ　島根県大社町日御碕
国民宿舎眺瀾（ちょうらん）荘

兼題　「緑」　中島生々庵選
「神」　大森風来子選
「寿」　浜田久米雄選
「ゆっくり」　河村　日満選
「正面」　柴田　午朗選
「島」　木村三雷波選
「湧く」　尼　緑之助選

会費　五〇〇円（投句料納入者は二百円）

祝賀費　七〇〇円

投句料　三〇〇円

投句先　〒六九三　出雲市塩冶町祥雲荘
板垣　草丘宛

締切　四月末日

（神話の里の国立公園日御碕へ、お誘い合わせご来賀賜わりますようご案内致します。）

尼緑之助句碑建立委員会
委員長　原　独仙

〒693　出雲市塩冶町五〇

デート重なり仲人をボイコット　花梢
ボイコットされた涙を知る枕　酔々
ボイコットやっぱり皮膚のゝにふれ　俊夫
ボイコットされて淋しさ噛みしめる　いさむ
蟷螂の斧ですませぬボイコット　静馬
メーカーが開きなおったボイコット　喜風
愛涸れて不買同盟つづく街　夢成
ボイコットする学生の肩を持ち　形水

兼題「自尊心」　菊沢小松園選

ぷっつりと鼻を折られた自尊心　祥月
自尊心に負けてはならぬ案を練り　季賛
自尊心強いお人で四面楚歌　一栄
自尊心生活扶助を辞退させ　晩歩
自尊心つついてやる気おこさせる　頂留子
自尊心捨ててあしたのある暮らし　柳信
自尊心は儲かりまへんと言う揉み手　どんたく
自尊心うっかり乗った口車　幸太郎
何くそと我が道選ぶ自尊心　章雅
誘惑に勝って淋しい自尊心　葛城
自尊心傷つけたくない日の虚勢　弥生
マイナスになること多き自尊心　恒明
養子ではないぞと標札二枚かけ　吸江
好きですとそれが言えない自尊心　多久志
自尊心腕組みしたまま老夫婦　生々庵
自尊心やたらに故郷捨てたがり　好郎
自尊心最も人間らしい時　智子
親友を一人失くした自尊心　維久子
反撥へ言葉を探す自尊心　滋雀
自尊心殺してセールス如才なし　三十四
ぼろ儲けひとつ逃した自尊心　天笑
自尊心しっかと抱いて都落ち　春巳
せっぱつまり自尊心など言うとれず　庸佑
自尊心樹氷となって見直され　柳宏子
お互に自尊心持ち負けていず　竹荘
自尊心傷つけあわず家裁出る　一三夫
自尊心捨てて気楽な友が増え　百酒
自尊心過剰で女ついて来ず　綾女
道化師の自尊心真白く塗りこめる　俊夫
安売りは出来ぬ暖簾の自尊心　肖二
底辺に住むちっぽけな自尊心　花梢
自尊心捨てて老後の職に生く　緑水
自尊心とは別スターの脱ぎっぷり　野迷路
ジョニイ黒をさりげなく飲む自尊心　鬼遊
お多福の目尻にちょっぴり自尊心　岳人
くちづけをピンタで除けた自尊心　金三
プライドの限界ででる美容室　夢成
謙遜の中にちらつく自尊心　好郎
自尊心人目につかんとこへ捨て　天笑
割り勘へ先輩としての自尊心　花梢
自尊心すり切れ停年やってくる　潔
自尊心そのかたまりのデスマスク　酔々
自尊心後ろ姿にあふれてる　野迷路
落ち振れて居ても白足袋汚してず　一舟
自尊心あたりの空気焦ら立たせ　小松園

★

▼室山三柳氏から二月号所載「川傍柳初篇研究」（百十五）683「石に勢あってかたまる赤穂塩」の「石に勢あって」は、謡曲「殺生石」の後シテの「石に精あり」の文句のモジリである。―おハガキをいただいた。

尼緑之助氏句碑建立
祝賀川柳大会
川柳塔本社主催の

山陰旅行へどうぞ！

出雲柳人と緊密なる交渉をつづけ、次号にはスケジュールや旅泊費などを発表します。

定員は三十名で締切ります。

日時は五月十三日（日）を中心になると思いますが、このチャンスを逃がさぬよう、スグ左記へお申し込みください。

〒581　八尾市八尾木八一七
西尾　栞
（電0729㉒5726）

★

「早春の瀞峡」旅行は、申し込み順定員につき締め切りました。

三月十七日（土）午前九時半、国鉄天王寺駅集合。

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。
金井文秋担当

八尾菜の花川柳会　飯田　悦郎報

ストリップ どの 辺までが 芸術か ✗ 女
ストリップに 誘われパッジ 裏返す 葵 水
ストリップどんなリズムで 踊るなり 栞
ストリップ 済んで男が 馬鹿になり 美 幸
人形師 土に いのちを 吹き 入れる 尚 山
人形の 汚れ なき 瞳を 子は 信じ 鬼 遊
人形 では ないぞ 銅像 胸を 張り 儀 一
人形の 覚悟で やはり 腹を 立て 小松園
毒 舌を 買 われ 加わる 抗 議 団 新之助
毒舌を 封じる 酒を 酌ぎ こぼし 柳 志
毒 舌が 魅 力 の 壺を 心 得 る 肖 二
毒舌の 子より 沈黙の 子を 恐れ 弥栄子
闇 汁 に 嬌 声 あげ て 年 忘 れ 悦 郎
闇汁が 煮えて 友情の 湯気 となり 酔 々
闇汁にルージュ 気にせぬ 味がある 知 佐
闇汁の 中で とけてる 舌 ざわり 美 代
闇汁 が 黄色い 声で みんな 売 れ 天 笑
振返る 仕ぐさと 合った投げキッス 誓 二
振返れば なんと 曲って 来た 道よ 寿美子
振 返 る 別 れ 逆 光 線 に 佇 ち 牧 人
振返る 財布の 紐を 解いて 見 る 鶴 声
石 女 あと 振 返 る 七 五 三 可 奈
口に こそ 出さず 互 に 振 返 る 吉 則
婦人科は 澄ました 顔で 如才 なく 連 夢
診察室に 玩具 を 置いて 小児科医 綾 女
診察もすんで 付 添 い 呼 ぶ 不 安 喜 風
診察に オーデ コロンの 胸 を あ け 花 梢

南大阪川柳会　金井　文秋報

正体は 善フラッシュへ 顔 そむけ 好 郎
チグハグな 茶碗で 仲のよい 夫婦 葵 水
なんとなく 正体 ボケた 聞き 合せ 誓 二
金 賞 に 輝 く 菊 の 立 姿 牧 人
正体に 触れられ そうで 話題 かえ 小松園
張り板が 忘れられてる 納屋の隅 綾 女
縁 談 へ 輝 く 瞳 が 娘 の 返 事 あいき
本 腰 が 今 度 も 宙 に 迷 よ て い た 古 方
本 腰 や そうなと 他 人 が かげで 云 う 凡九郎
若さ とは いいな 体力 有り 余 り 静 香
コンパクト もう 胸算 に 輝 く 目 恒 明
板一枚 下 の 地 獄 に ある 魅 力 柳 志
本 腰 で や る 気 に なれば 持 病 が 出 一 舟
執念が ジギルとハイド 突きとめる 文 秋
招かざる 客 本腰で 飲み はじ め 滋 雀
地下足袋の 上へ こぼした 茶碗 酒 金 三
逆 境 へ フ ト 体 力 の 有 難 く 儀 一
みちたりた 朝板の間の リズミカル 好 一
体力 と 根性 で 王座 守 り 抜 き 肖 二
本腰でやれば 負けぬと我を 折らず 鶴 声
減食の 茶碗 へお 代り 心 得 る 形 水
正体が こぼれ 酒宴の 日 の 不 覚 君 子
体力が ないのか 秋を 早く 知 る 智 子
体力を 犒う 妻 の 眼 は 優 し 喜 風
年寄に 体力 つづかぬ 職 ば か り 静 馬
体力を たより 点 滴 ま だ つづけ 千万子
飲み足らぬ 男に茶碗じゃ まがられ 十 郎
母子 家庭 輝 く 星 を 父 と き め 一 栄
輝きを わたし ひとりの 朝に 持ち 悦 郎
軒つ ら ら 輝 く 零 と なって 落 ち 章 雅

どんぐり川柳会（大阪市）谷垣史好報

返してと 言えない 内に 溝が 出来 重 夫
嬉しい 日 妻の 雑 布 よ く 動 き 悦 郎
正体は 知らぬが 売薬 効いて くる 小松園
夜が明けるまで 売薬でまに 合わせ 吸 江
汚れなき 溝の流れも 嵯峨のもの 好 郎
溝にまで 来て 一滴の 水にごる 岳 人
酒ぐらいでは 埋められぬ 溝となり 薫 風
妻 の 風 邪 売 薬 よ り も 卵 酒 比呂路
付き合いの 深さをみせる 溝さらえ 三 生
意地と 意地ますます溝が 深くなり 宏
幸 せ は 心 の 溝 を 流 し 合 い サヨ
暇あれば 雑布を さす 母 が あ り 真 砂
雑布の 冷 た さ を 知 る 年 の 暮 いわを
早口へ かえす 暇のない どもり 之 保
ゆっくりと 口説いておれぬ 新幹線 痴 亭
年 寄りが 居て 早 々 と ✗ 飾 り 草 春
溝 だけが 整 理 正 し く 造 成 地 幸 一
湯の街の 溝にも湯の香 ただようて 百 合
観音の 御 利 益 添えた 家 伝 薬 酔 々
早よ 云おと 思えば 思う 程どもり 儀 一
仕立物 遅れ 遅れで 早や 師 走 弥 生
売薬の 定価は 当てにならぬもの 喜 風
父と子の 溝を 埋める 語を 探 す 鬼 遊

貰い手も ない雑布を 祖母は 縫い 凡子
人生の 迷路 どぶ板 ばかり 踏み 修史
思いきり 喧嘩 夫婦の ミゾが とれ 史好

川柳たけはら　森井　菁居報

ひとり なら 変身 した し 十二月 静水
ある日突然こうもいろんな事の起き 房子
ボーナスを貰った日ぐらい早ばえろ 蘭幸
そこで今日 話した人の 事故を知り 凡女
水俣に 資本 の 冷酷 思い 知る 東紅
障子 貼る 後 姿 にある 平安 不朽
果しない 欲望 ざくろの 口が 裂け 文明
男でござる 何にもして くれはらず 浄美
鍵 束 の 一 つ 一 つ に 冬 の 音 鬼焼
雲走る 貴方の 住んでいる 町へ 笑子
十円へ 一万円が 役 立たず 一路
気の若いところが取り得かも知れず そのみ
ひとのみちふんでのどぶぼたんゆき 菁居
負けてたまるか冬を倒せば春が崩ゆ のばら
人生の 一こま 旅の 湯に ひたる 貞子
失意の日 酒が言わせた 愚痴となり 雅鳳
大阪で ボーとか すんだ陽をおがみ 政己
四十肩 ぼちぼちせんと いかんらし 英詩
人間 の 特権 夢を つ み か さ ね 酉合
欲のない 子には カバンが重たすぎ 扇水

川柳ささやま　河原みのる報

風呂 しきの 柄で 来客 間 違 わず 可住
陥し 穴落 ちた 同 士 の 共 稼 ぎ 蜻蛉
猪 の 鼻 が 痛 か っ た 陥 し 穴 越山
チャリンの 快感 パチンコの陥し穴 緑村
ふり 向くも 所詮 墓石 石 なりき 近江
ふり 向きも せず 粛 々 と 葬 の 列 素水

ボールペン腹が 立っても 丸う書け 無聖
マジックで 力の こもる 署名 する 村雨
聞きとれぬ分ボールペン添えて出し 竹堂
ボールペン 万年 筆 の お株 取り 松堂
マジック書き万円の中味泣いている 百合子
消しゴムの効かぬ不使さボールペン よしの
人間の 社会 にもあり 蟻 地 獄 梅枝
底知れぬ 業の 深さや 片 笑 くぼ みのる
高く 売る 肉体として 着 飾 った 英断
高級 の 洋装 追えば 路地 に 住み をさむ
家計 簿へ 叱られて いる 酒 の 息 初音
金の要るわけ 家計簿は 知っていた 八陣

オーエスケー川柳会　大坂　形水報

桜花賞 くしゃみ ひとつで運が落ち 川上
雑巾 の 使い 方 に も 年 の 甲 大山
あわよくばぬれ手に粟も 運のつき 真人
忘年会 これで 終り と 三次会 創三
我が 仕 事 終りの なき 闘いか 中西
古シャツ が 雑巾に なる 大そうじ 西岡
雑 巾 を 握 り 心 を 洗 われる 亜成
運不運 隣 り 合わ せ の 前後賞 博泉
終りにはどうでも結ばすメロドラマ 千夢
終電に 見 なれぬ 顔も 年 の 暮 常夢
終い 湯を 出れば 寒 月 冴え 渡り 神田
命あるかぎり 運 を かついでる 聖地
夕焼けが 恋の 終りを 連れて 去に 一扇
運当てに しない 男へ 運が 向く 形水
旅客機の 座席 にあった 運不運 入仙
兄さんと 思うて いました 恋終る 好郎

川柳東大阪　竹中　肖二報

勝負師の 根性 裏目に 耐えている 柳宏子

男一匹 裏目を 明日の 日に 捨てる 雀踊子
話半分にして 其の裏目まで 考える 小松園
灯 に 坐 る 心 と 別 な 三 の 糸 六龍子
茶柱が 立っていますと 坐らされ 静歩
禅寺で 社命 やむ な く 坐ら され 儀一
断絶の 母 子 仏 間 の 灯へ 坐 り 兎月
停退 の 今日 床柱 へ 坐 ら され 三十四
ぽつりぽつり根ようローカル列車? 古方
ローカルの 駅で 一人降り一人乗り 一栄
日々 好日 そんな 生活 にも 裏 目 凡九郎
ちいさな 町の 小さな 城へ 流れ星 酔々
妬 まれた 星かも 知れぬ 流 れ 星 誓二
流星のように ホステスもう 居ない 悦郎
待ち ぼうけ 一ッ 二ッの 流 れ 星 肖二
流れ 星と 叫ぶ 声より 早く 消 え 綾女
流れ星デートの 話題 また つなぐ 文秋
天国も 住みにく いらし 流 れ 星 葵水
流れ星が 一 役 買うた ラブシーン あいき
板の間で 義理は つめたい飯を食い 鬼遊
坐女の 舞う 板の間 清い 足 の 音 喜風

川柳大阪　児島与呂志報

再 会 を 約 し 握 手 を し て 別 れ 武松
うろこ雲 病床わずかな さわやかさ 戸無
柿 一 つ かくも 美くし 床 に 活け 一乃字
枕辺に 不孝を 詫びる 一と しずく 漁人
濃い 化 粧 ぬって 女 の 曲 り 角 ひろ美
公園に 来て 自制心 くずれかけ 力泉
きゆくつな ネクタイ通勤 だけ外し 秀峰
門に まで 見送 る 母 の 遠 足 日 呑歩利
地下の駅 今年も 忘れず 虫が 鳴く 敏
パパとしてにらみを利かすヒゲをそり 胡蝶

男一匹 イニシアチーブの 胸を張る 誓 二
軽蔑の 眼を おんなのすれ 違い 喜 酔
好敵手 差す手引く 手を知って 居り 重 人
耐えに耐え耐えて落した一としずく 洛 酔
ブランコもすべり台にもまだ飽きず 笑 風
やり込めた あとで謝る ことが出来 本蔭棒
曲り角 見ては いけない 物を 見る 徹 舟
もぎたての 柿 一と かぶり 秋の味 真 実
ふと俺の影が一緒に寝てるなと思い 与呂志

川柳ささやま 河原みのる報

顔色を 読む子に なって伸び切れず 八 陣
点字読む 児の 行く末を 母背 負い 百合子
点字読む 指へ 必死の 血が かよい 無 聖
ポルノ 読む 夜長へ 虫に 耳かさず 素 水
週刊 誌 見て いる 人の 顔を よみ 拓
ボリュームの 妻を忘れて 鶴をほめ 初 音
ボリュームが去年の服を寄せつけず とおる
ボリュームは 独占された ミニ亭主 蜻 蛉
ボリュームの いい 嫁村の 人気 者 雅佐女
判コ押す 段で 賛成の 手が どもり 可 住
何ンべんも 算盤 おいてした 賛成 近 江
しまい迄 聞かず サクラは 賛 成し 無 鬼
賛成 を 強く 大きく 署 名 する 清 香
含み笑い して 読んで いる 本覗く 英 断
栄養士 ワイフにもって 腹が へり みのる
レバばかり喰ってニキビの跡絶えず 竹 堂
予想する 間も なく 現実に 追われ 一 声
気前よい 遺産に 穴が あいていた 村 雨

和歌山七面句会 三 幸 報

その 裏が あって 哀しき 人の 性 一 光
不渡りを 出して 養子は 後を 継ぎ 太茂津
清 貧 に 堪えて 微笑 の 年 逆え 富 子
笑ったはずの みんなが 泣いている 春 子
笑 わ ない 唇 酒 に ぬれている 葵 水
裏通り 灯が つく 頃から 表 なり 清 三
たよりきて 一笑に ひめ 読み 通す 光 治
裏鬼 門 などと 人 間 弱 いもの 勇 次
ありっ たけ 女 の 際 の 大 笑 い 智恵女
入り込んで 養子仮面を 脱ぎすてる 清 和
笑う だけ 笑って 正 月 腹 へらす 城 石
裏道 を 歩く 運命に した 美 貌 淳 子
楽屋 裏 母子で 客の しな さざめ 政 夫
履歴書に 裏口 入門 とは 書 かず 佐智子
先生も 養子 ですかと 同 情 され 清 治
へそくりを 猫に見られている養子 酔 々
片 袖 の 笑いの 中 にある 女 芳 童
裏話し 言わ ねば ならぬ 委 任 状 三 幸

南海電鉄川柳会（大阪市） 辻圭水報

カラカラと汲み上げてのむ井戸の味 千代子
ディスカバージャパンポスター も寺を入れ 圭水
美しさ 世界 に 誇 る 四 季 の 国 清 女
ディスカバージャパンなぜと商魂たくましく 儀 一
観光 日本 緑の 破 壊 惜しみ なく 宏 子
ディスカバージャパンドルの準備もしてるなり 魔天郎
フジゲイシャディスカバージャパンゆがめられ 柳 信
ディスカバージャパン 福祉国家と名を変えん 誓 二

まるべに川柳会 村田 瓢太報

千円の矢飛ぶように売れるこの景気 トキエ
旧姓 を 小さく 記せ る 賀状 来る 貞
おのが 力 知って この 上 仰ぐまい 慶 子
そのうちに 親が 必死の 凧 の 糸 節 子
今日限りサヨナラを言う五時を聞く 寿 子
兄弟子は 油断と 見せて 先を 読み 扇 里
初旅 は 梅 咲く 宿で 屠 蘇 祝 う 星 斗
門松が 大き 過ぎ てる マイホーム 茂 児
逆夢 と 信じ 初 夢 めでたがり 好 郎
鳩・九官 正 月 だとて 同 じ 餌 瓢 太

駒つなぎ（大阪市） 岸 南 柳報

経済は のびても 公 害 悔 のこし 横 地
後 悔 を 重 ね 続 け て 又 馬 券 規 一 郎
半 生 を か け て 悔 な し 舞 扇 秀 代
遊びたい 盛りを 机に 縛 ばられる 金 三
石の門 遊んで もらう つれ がなし 摩天郎
酔うてます酔うてませんと酔うている 一点子
飲むほどに 年を 忘れて 見る 笑顔 南 柳
通夜 更 け て 酒が 話の 刻 つなぐ 多津緒
コップ酒 脱サラ 談 議 まだつづき 潔
かいほうをされたい酒が酔いきれず 柳 信
酒の 味 わ か らぬ 奴 の 特 級 酒 儀 一
いけばなの 竹酒吸うて 新春を待ち 恭 太
高校 生の くせに 覚えた 盗 み 酒 誓 二
酒はよし 世の中 楽しくなって来る 肖 二
底 力 酒の お陰で 湧 い て 来 る 点心坊
酒の上 言 い に く い 事 並 べ 立 て 悟 郎
階段 で 幹事 銚子を 打 ち 切らせ 香 豊
酒好きと 知ってうまが 合いはじめ 宏 子
酒飲めば 年を 忘れる 悪 い く せ 小 路
水の 酒 のんで 寅さん 酔いつぶれ はやを
酒 飲みの 気焔に 合わす 生 返 事 綾 女
おでん屋の やぶれ 障子に見る縮図 み よ
内職 を 片付け 酒 の 燗 に 立 ち 小松園
祝 杯 ほ 忍 耐 で す と 琴 桜 育 園

城北明朗句会 川口 弘生報

聞いて来た松を見上げてベルを押し　春　果
お隣りの　火鉢にも　沈丁　花　植わり　弘　生
新築の木の　香にしばし　酔いしびれ　濁　水
古かろうと　素顔　美わし　桐　ダンス　満津子
五十鈴川ひわだ　香りも　あらたかに　志　津
象牙　より　南天の　箸　お気に　召し　繁　子
樫の木は切られた　後もたたき　合い　生　仏
朝　夕に　木魚の　口の　一　文　字　ますゑ
山の木を　切って　天災　荒れ　くるい　茶々坊
裾　おろす　うれしい　人の　水見　舞　為　二
山の　辺の　道は　アベック　通る　所　集　人
クーラーにテレビ出て涼む人もなし　つ　ね
浪　費　せず　楽しく　暮す　是　好　日　秀　村

ハワイ・ウイロー社　林　蒼蛇楼報

嘘　一つつけない　人が　首に　なり　拝　山
知りながら　騙されてやる　親　心　紅　渓
すまないと　心で　詫びて　嘘を　言い　エス子
信じてるように　夫の　嘘　を　聴き　公　女
受け　とって　慌てて　かくす　貰い文　稠　雄
ぬけ　ぬけと　大臣の　嘘は　通ります　美千香
さし出したマイクへ慌てて遠く居る　雪　女
口上手　嘘と　知りつつ　乗せられた　千枝女
弗ショック　悲喜交々の　あわてぶり　河　舟
方便の　嘘で　どちらも　丸くゆき　椰子郎
見抜かれた　嘘のきめては　この指紋　峯　円
慌てずに　聴けと相手を　きめつける　三　石
あわただしい　生活に　匂う茶の香り　暁　舟
嘘だとは　思えぬ程に　ほれた　振り　十　吉
どうにでもなれと捨て身で嘘をつき　明　女
珍客に　さて　とば　かりに　妻あわて　快夢起
嘘ついた　後の　心にある　空　虚　万里歩
若いネは　うそと知りつつ嬉しがり　カロ女
叩き売り嘘と　知りつつ　乗せられる　六　枝
あわてずに成るにまかせて時を待ち　美沙子
患者には　胃潰　瘍だと　言って　おき　蒼蛇楼

雅号ぶっちやけばなし（108）

きゅうこう

かさはら

笠原　吸江

本名、健二、生まれは岡山県笠岡市、山陽本線で須磨、明石を過ぎてこんど海が見えるところが笠岡です。遥か向いに鞆の扇酔島の見える静かな入江で昔から別名吸江湾と云ったそうです。母校の同窓会も吸江会と云いそんなことから私が曾て短歌、俳句をかじっていた頃吸江を雅号としていたので川柳に変っても適当な雅号がみつからないのでその儘吸江を踏襲している次第。知らない人は女性かと感違いされるようですがれっきとした男性です。川柳を手引きして下さったのが川村好郎師です。病院入院中のことです。あれから十三年程になりますが句の方は一向上達せず申訳ないようですが一生続ける覚悟です。

（会社役員）六十三歳

大阪市文化祭

三月九日、十日、十一日

川柳大阪（市交通局）川柳展

会場　四ッ橋

消防センター

川柳塔社常任理事会

二月四日が日曜日のため三日（土）に常任理事会を開らく。

出席率があやぶまれたが暖冬でもあり出足は上々。まずは福は内というところ。

議題は五月十三日の尼緑之助氏の句碑除幕式参加を兼ねて、本社主催の旅の会を今年は山陰方面観光ときめた。この団長には旅行マニアの西尾栞副主幹があたる。

定員三十名とし、寝台車確保などの関係から申し込み順に定員になると締切ることになる。別報のように栞氏へ早目にお申し込みねがいます。

この旅行には出雲市の同人とも綿密な打ち合わせをおこなっている。

出席―西田柳宏子、河井庸佑、大坂形水、本多柳志、中島生々庵、阿万万的、西尾栞、橘高薫風、菊沢小松園、不二田一三夫諸氏。

本社三月句会

日時　三月七日（水）午後六時
会場　以和貴荘（いわきそう）
阿倍野区松崎町二丁目
電話622・1275番

柳話　川村好郎

兼題
「ヒナ壇」小浜牧人選
「本心」金井文秋選
「手落ち」本多柳志選
「草」正本水客選

席題　二題　当日発表
会費　二百円

各題三句以内厳守

★投句だけの方は切手50円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷仲之町20
川柳塔社

4月の兼題　「モニター」「日照権」「指紋」「軽い」

・募集・

五月号発表（3月15日締切）

川柳塔（10句）　若本多久志選
水煙抄（10句）　北川春巣選
課題吟（各題5句以内）
「五月晴れ」原独仙選
「記憶力」今西章雅選
「来客」中川晃男選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

六月号発表（4月15日締切）

川柳塔（10句）　若本多久志選
水煙抄（10句）　北川春巣選
課題吟（各題5句以内）
「庭」森下愛論選
「代読」平田実男選
「久しぶり」舟木与根一選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

何を選んでいたゞくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのも心にくい贈物かと存じます
一〇〇円から一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都3店に共通です
大阪・なんば
東京・日本橋
京都・四条
高島屋

定価　二百円（送料十六円）
半年分　千二百九十円（送料共）
一年分　二千四百円（送料共）
昭和四十八年　二月二十五日印刷
昭和四十八年　三月　一　日発行
編集兼発行人　大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地　中島蓬太郎
印刷所　大阪印刷株式会社
郵便番号　542
発行所　大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地　川柳塔社
電話大阪・二七一―三九八五番
振替口座　大阪・三三三六八番

・ペンペン草・

★「川柳雑誌」の四百号記念は〝誌寿四百号記念川柳大会〟として開催、雑誌も同人句集を入れて特別号にした。五百号は四十四年一月号だったが、そのころは「川柳塔―四〇号」だったため、その五百号という記念号への関心がうすかったようである。

★前号でもちょっとふれたように、本号は五百五十号になる。四年さきの〝六百号〟には五百号記念分とともに盛大に何か同人の皆さんも考えていただきたい。

★来年十月号で「川柳塔十周年記念」になる。これには同人句集が予定されているが『安く』というのが合い言葉になっている。よそさんの台所を覗くのは失礼だが「ふあうすと川柳作家年鑑」が作品10句で八百円ということである。

★この同人句集の具体化はここ一、二か月後に取りかかることになるだろう。

★話をもどすが、誌齢五百号以上ともなれば長寿誌でありご同慶にたえない。このうえは長寿誌としての風格をおたがいに大切にしたいものである。それには風格ある作品で誌上を飾るいがいに何ものもないようだ。

★長寿といえば、常任理事の若がえり法が話題にのぼることがある。同人誌の場合は、運営その他のモロモロの難問題があり、棧敷や立見席からではなく楽屋裏ものぞいてもらわないとわからないことが多い。

★前号の〝水煙抄〟に「グロリア・スワンソン」を登場させた句がある。これで作者も選者の小松園氏も長寿型であることはまちがいないが、もし若い選者ならこの句は没になっていることであろう。かと云ってその選者に文句をつけるには「グロリア・スワンソン」は古すぎるとおもうのだ。これなどもむかしの映画を知らない人には〝難解句〟の一つである。せめて誰でも知っている「松井須磨子」ていどならと考えるのだがどうだろうか。

★話がちょっとカーブするが、人間の長寿法の一つとして、心のすすまぬ会に出席せぬこと。会って話を交わしていても不愉快になる人は敬遠すること。だそうだ。

★この長寿法からいくと、ボクは相当長生きするようにおもう。仕事の性質上、刊行記念パーティなど多い月には二回ぐらいあるし、年末年始の会が相当数ある。これを全部ことわってしまうのである。ただしアルコール抜きの会には卒先して出かける。ボクのわがままは今や公認のかたちになっているが、話の合わぬ人と対座すると時間が長くてこまる。あの不愉快さかげんはたしかに命をちぢめるものがあるようにおもう。

★会話というものは漫才のように〝突っこみ〟と〝受け〟があって、カシコとボケになると話が実に愉快である。突っこみ―のほうが話題のネタをまいていく。〝ボケ〟のほうがその話に乗ってやると絶えず笑いがともなうもので、これを話し上手に聞き上手というのだ。ボクのわがままはこれからもつづくだろう。

★発送などで毎月お世話になっている天笑氏と岳人氏を編集部へお迎えした。

★よろしく（天笑）金剛山へどうぞ（岳人）というご挨拶。（不二田一三夫）

▼葉子コーナー

▼「茶店（さてん）に行こう」10年前位より高校生が多く使っている言葉らしい。私達の時代は喫茶店が少なく、レストランでコーヒーを飲んだのを思い出します。時代と共に洒落た言葉も次々。「茶店に行きましょか」と不二田様に使って、一時でもヤング気分に顧るようにと、細やかな願いをこめるこの頃です。

疲労回復・肩こり・神経痛に
アリナミンA
☆25ミリ錠・ほかに5ミリ錠
☆食後すぐのむのが効果的です
☆くわしくは医師や薬局・薬店で
タケダ
28

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十八年二月二十五日 印刷
昭和四十八年三月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻五五〇号

川柳塔 三月号

美の殿堂
大和文華館

平城京をめぐる山々を一望の静かな環境にある大和文華館は　日本建築の特色に近代美を生かした美術の殿堂です
収蔵品も日本・中国を中心に国宝・重要文化財を含む　有数のコレクションです
観覧時間…10時～17時
▶近鉄奈良線　学園前駅すぐ

近鉄

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ！

豚　饅
焼　売
焼餃子
豚まんの王様、やき豚入り
叉焼饅

大　阪・なんば
蓬莱
TEL(641)0551～2

551

<出張店> なんば高島屋／虹のまち鹿鳴／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
京阪デパート／堂島地下センター／中之島サン・ストアー／なんば新川店／奈良近鉄百貨店

定価 二百円（送料十六円）